
白銀の日々

千紗子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀の日々

【Nコード】

N2827R

【作者名】

千紗子

【あらすじ】

藤原浩正、12歳。いつかフィギュアスケートのトップ選手になることを夢見る中学生。中1の夏にカナダの合宿に参加したのをきっかけに、彼はカナダで練習することになる。新しい友だち、コーチとの出会い、そして生まれた時からいなかった「父親」の影……ちよっと背伸びしがちな男の子の、青春と家族のお話。

プロローグ

逆巻く流れにかかる橋のように。

1970年代に大ヒットを飛ばした曲の、美しい旋律に合わせて、スピンを回り、ステップを刻む。

会場中に設置されたライトが、ただ俺だけを照らし出していた。会場を埋め尽くした観衆の視線全てが、俺一人を見つめている。薄暗闇の中でも見える、赤と白の国旗が、試合の時の狂乱とは違ってかわって、静かに揺れている。

静謐で美しい、青いライトの中を、俺は自由に泳ぎ回った。

オリンピック、フィギュアスケートエキシビション。

4年に一度の競技会で、上位に入った選手だけに与えられた、感謝と喜びを示す舞台。

旋律のうねりに合わせた、リンク全体を使う大きなイナバウアー。イーグル。トリプルルッツの離氷と同時に、削られた氷がライトの中で舞い散る。こぼれるような音符とともに、深くエッジを倒して、氷の上に吸いつくようにステップを刻む。最後は、手を上に挙げた基本的なアップライトスピン。競技とは違って、見ばえの良いはかり技が並ぶ。ここまで応援してくれた人たちに贈る、最高に美しい演技。

ステップに合わせて規則正しいリズムを打っていた拍手が、加速するスピンと並んで、スピードを増してゆく。そして音楽の最後の一音が鳴り終わると同時に、その拍手は狂ったように割れ、歓声とともにアリーナ中に散らばった。

はやる気持ちを抑えて、四方にお辞儀をした後、俺はリンクサイドの出入口に駆け寄った。

「ヒロ」

次の選手の邪魔にならないように、父は少し奥に立っていた。俺が感極まって飛びつく前に、ぎゅっと抱き寄せられる。フリーが終わった時にはなかったのに、鼻の奥がツンと痛んだ。

「素晴らしかったよ」

その声は、少し震えていた。

逆巻く流れにかかる橋のように。

君を慰め、君を助けよう。

この歌は俺にとって、まさに父のことだ。この人がいなければ、俺はきつと、ここまで来られなかった。俺にスケートの道を示したのは母さんだけど、俺の背中をここまで押し続けてくれたのは、この人だった。俺のスケートを見守り、支え、時には引っ張ってくれた人。

俺は人生の3分の2を、この人を知らずに過ごしたけれど、残りの3分の1は、この人なしには歩んでこれなかった。そしてこの先の、長い長い時間も。

言いたいことはたくさんあるのに、今は何も言葉が出てこない。

「おめでとう、ヒロ」

ありがとう。

その声が、彼の耳に届いたのかはわからない。

大きな手が、震える俺の肩を、優しくたたき続けていた。

1 (前書き)

この小説は、現実に存在する一切の人物・団体といかなる関係もありません。

初めてスケートリンクに行ったのは、2歳のときだった。

アメリカのアイスショーの日本公演。真冬だった。会場は冷え切っていて、吐く息も白かった。氷の直ぐそばの席で、母の腕に抱かれ、スケーターたちが氷の上を滑っていくのを、俺はわき目も振らずにじっと見つめていた。旋律に合わせてエッジが氷の上に描く軌跡は、淡く広がるライトを受けてきらきらと輝き、蹴り上げられた氷の欠片が、音楽の中で雪の結晶のように舞い散った。この世のものではないような光景だった。

まだ2歳だったから、どんなスケーターが出演していたかは、ほとんど覚えていない。その演技も。ただ、一人だけ、記憶に残っている人がいる。その演技の後、俺は多分、褒めるようなことを母に言ったのだと思う。その時、俺を抱く母の腕に、少し力がこもった。そうね、とても綺麗だわ。

きらきらと輝くような軌跡を描きながら、重力など知らないかのように滑っていったその人の姿は、どれほど記憶を巻き戻そうとしても、像を結ぶことはできなかった。

ただ、答える母の顔が、どこか悲しそうだったのが、今でも脳裏に焼き付いている。

母にねだってスケート場に行き、自分で滑ることを覚えたのは、それからまもなくのことだった。俺はあっという間にうまくなった。最初は母がそばについていたけど、そう経たないうちに、俺についてこれなくなつて、遠くから心配げに見守るだけになった。そして専門的に習わないかと言う声がかかったのも、4歳になる前だった。それからずっと、俺は毎日のように、リンクに通い続けている。

『冷蔵庫に茶碗蒸しとしょうが焼きが入っています。しょうが焼きはレンジで温めてね。今名古屋にいるの。遅くなりそうだけど、いろいろを買って帰るわね』

平日は学校が終わった後、リンクに行く。そのうち3日はその前にダンスのレッスン。練習が終わった後、携帯に届いたメールを見て、俺は手早く返信を打って、さくさく着替える。時間は9時。まだぎりぎりサラリーマンが歩いている時間だ。これ以上遅くなる前に、駅に着きたかった。

急いで着替えて荷物を抱えた後、外に出ると、慌ただしい足音とともにコーチが走ってきた。

「ああ、浩正君、良かった、まだ帰っていなかったのね」

「あ、はい。もう帰りますけど」

「そう。ねえ、お母様のことだけれど、お迎えには来てもらえないかしら」

「それは……ちよつと」

スケートを習うのは、普通、母一人子一人の家では無理なくらい、お金がかかる。それでも、母は一度として反対しなかった。その分、母は忙しい。土日もしょっちゅう会社に呼び出されるし、家に帰ってきてても夜遅くまで仕事をしている。

一緒に習っている子たちは、大抵家が金持ちで、誰かしら迎えが来てくれる。俺みたいに、小学生の時から一人で通っているのは珍しい。でも、他の子みたいに送り迎えをしてもらえなくても、滅多にちゃんと話すことができなくても、不満はなかった。一人で電車に乗ってリンクに通うくらい、たいしたことじゃない。

「通うのは、一人でも問題ないですから」

「ええ。浩正君はしっかりしてますからね。でも、どうにか来てもらえないかしら」

コーチは、珍しく食い下がった。

「母に何か用ですか？」

「大切なお話があるの。浩正君も一緒にね」

「今教えていただくことはできませんか？」

多分無理だな、と聞きながら思った。

母をわざわざ呼ぶという事は、コーチからみると、それなりに込み入った話なのだろう。

「それはちよつと。ごめんなさいね」

「わかりました。母に話してみます」

「なるべく早くにお会いしたいわ。急ぎなの」

急ぎ、といつても、コーチは、小さなことをちよつと大げさに騒ぎすぎることがある。前も、どうしても母を呼んで欲しいと言われて呼んだら、別に電話でも済むような用件だった。母は後で苦笑いしていたけど、先生には先生の考えがあるのよ、今度言われても、素直に私を呼べばいいわ、とも言っていた。それを思い出して、俺は素直に頷いた。

「あら、もう遅いわね。友美さんのお母さんがちよつといらつしゃるから、送ってもらったらどうかしら」

「大丈夫です」

友美ちゃんは、俺と同じ年の女の子だ。わりと仲はいい。浩正くんも送つてつて、と喜んで母親に頼んでくれるだろう。でも、俺はいいけど、こつというのは後で母がお礼をしなければいけない。母に余計な手間をかけさせたくなかった。

「駅まで5分ですから。お気遣いありがとうございます。また明日」
ぺこつとお辞儀をして、俺は小走りに駅へ向かった。

母にメールを送ると、11時前には帰れるということだったので、俺は待つことにした。

11時を回る直前、母が帰ってくる。少しだけ酒のにおいがした。いつもまとめている髪はすでにおろしていて、肩に垂れていた。久しぶりにちゃんと見る母さんの顔は、相変わらずきっちり化粧してあつたけれど、少し疲れた様子だった。

「そろそろ寝ないとダメよ」

玄関の扉の音を聞いて、部屋から出てきた俺に、母はちょっと眉をしかめた。

「ん、でもちよっと話があって」

「なあに？」

服をハンガーにかける手を止めて、母がこちらを向く。

「コーチがさ、母さんに話があるって」

「私に？」

「うん、母さんと俺に。今は言えないって言われた」

「そう……」

思案顔で、母さんは椅子を引いて座った。

今まで、コーチが話があるといっって母さん呼び出したことは結構ある。でも、事前にどういっ話か察しはついた。大会の出場とか、合宿とか、そこらへんだ。でも、今回は時期的にもさっぱり検討がつかない。

「なるべく早くがいいって」

「ちよっと待つて」

手帳を取り出して、母は予定を確認する。

「来週の月曜、夜10時くらいならなんとかなるかもしれないわ」
練習後、しばらく残ってればいい時間だ。

「わかった。聞いてみる」

「ええ」

手帳をしまい、母は首をかしげた。

「最近どう？」

「ルッツが相変わらず。でも、今日は5割くらいできたよ」

ルッツは特に筋力が必要なジャンプで、アクセル以外の5種類の中では一番難しい。一流選手でも、ケガ明けだったり、疲れていたりとすると、結構失敗する。練習し始めて結構経つけど、まだプログラムの中で成功できるレベルじゃない。

「ケガには気をつけるのよ」

「うん。俺、そろそろ寝るね。母さんも体壊さないでね」

「ありがとう。気をつけるわ」
花のほころんだように微笑んで、母はちょっと手を振った。
すごい美人と言うわけじゃないけれど、俺は母さんの顔が好きだった。いつも俺に微笑んで、後ろで見守っていてくれる。髪の色と瞳の色以外、母さんにはこれっぽっちも似たのは残念だ。俺の顔は、姿も知らない父親にそっくりらしい。母さんは、そのことがそれなりに嬉しいみたいだけど。

月曜日。母は約束の10時にギリギリ間に合った。

「急なお話なんですけどね」

応接室で、俺と母に向かい合って、コーチは口火を切った。

「浩正君、海外の合宿に行く気はないかしら、と思つて」

「合宿、ですか」

思つてもみない言葉を聞いて、俺は噛み砕くように、繰り返した。
「ええ。世界中から実力のある子が集まるし、広い世界を見るのは、表現力の上達にもとても重要だと思います」

「海外での合宿は、もう少し先のことだと思つていましたけど」

母が口を挟んだ。俺もそう思う。海外で練習したり、強化合宿に行ったりする先輩はいっぱいいる。でも皆、高校生くらいだ。中学に入つたばかりの俺には、少し早い。

「連盟の推薦方針は確かにそうですね。でも、個人で行く分には早い遅いもありませんよ。中学生の場合、学校の問題がありますから、行く子は確かに多くありませんが」

「どれくらいなんですか？」

学校の話が出たので、俺は聞いてみた。ただでさえ試合で学校を休むことが多いのだ。これ以上欠席日数を増やして、クラスから浮きたくない。

「夏休み一月くらいですね。だいたい、8月いっぱいと考えてくれれば」

「興味はありますけど……」

夏休みなら問題はない。でも、俺は母を見た。それほど長い合宿となれば、相当お金がかかるだろう。海外旅行に連れていってもらったことはあるけど、一月丸々なんて、考えてみたこともない。

「どちらなんですか？」

隣で黙っていた母は、静かに聞いた。

「トロントのリーススケーティングクラブです。ご存知かしら」

ゆるく上を向いた睫毛が、何度か上下した。母は知っているようだ。でも、俺はリーススケートクラブという名前を聞いたことはない。トロントはカナダの大きい都市だ。首都ではないのがポイントだ、確か。それはどうでもいいとして、カナダは、アメリカに次ぐスケート大国だ。つまり、リーススケートクラブも、有名なコーチがいるところなのだろう。

「……ええ、知っています。エリザベス・ドーリツシュコーチのところですね」

そのコーチの名前を言われて、俺もようやく事の重大さが飲み込めた。何人もの有名選手を育て上げた名コーチだ。今年の世界選手権で銀メダルをとった、フランス・オルコットのキスクラに座っている姿を、テレビで何度も見た。

「そのの、ミランダコーチとお友達なんですけどね、今年が一番上のクラスの人数が少ないから、良い子はいないかと言ってきて。で、ビデオを送ったら、浩正君にぜひ来てほしいと、ドーリツシュコーチから直々にお電話を頂いたんです。無理にとは言いませんが、遠くないうちに国際大会にも出るでしょうし、行って損はないと思います」

「費用は？」

最大の問題だ。ドキドキする俺をよそに、母はあっさり聞いた。

「まあ、ざつとですけど、これくらいですね」

コーチは母に紙を渡した。英語みたいだ。母は軽く目を通して、まあこれくらいでしょうね、と頷いた。

「浩正君、英語は大丈夫かしら」

「えっと、日常会話くらいなら」

母は、あまり教育ママというわけではなかった。でも、英語だけはやけにこだわりがあるらしく、休日は俺に英語を教えていた。英語のビデオなんかも良く見せられた。本気でスケートを続けるつもりなら、英語は絶対に要る。英会話塾に通っているスケート仲間も少くない。

費用の紙をしばらく眺めた後、母は俺を向いた。

「浩正、あなたはどうなの。行きたい？」

俺は少し迷った。

本音を言えば、行きたい。でも、お金はそれなりにかかる。強化指定を受けているならともかく、まだ何の支援を受けていない現状で行くのは辛い。それに、母の態度も少し気になった。困惑したよ
うな、そんな雰囲気がある。

「費用なら気にしなくていいわ。いずれかかってくるものよ」

母はじつと俺を見つめた。

黒い瞳が、まっすぐに俺を捉えている。それはどこか、俺が行くことを、望んでいるような気がした。

「……行きたい」

母はうなずいた。

コーチは嬉しそうに胸の前で手を合わせた。でも、俺はなんだか、もやもやと不安なものが、胸の中で広がっていた。

「へえ、いい話じゃん」

カナダでの合宿が決まってしばらく経ったある日、ジュニアの中間選手が一時帰国してきた。小さい時からずっと一緒に練習していた人だけど、何年か前から海外で練習をするようになって、一年のほとんどはアメリカにいる。今回は日本の振付師に振り付けをしてもらうためにちょっと戻ってきただけだ。線が細くて穏やかな人で、よく海外選手の話をしてくれる。

「カナダはちょっとしかいなかったけど、環境もコーチもいいよ。ドリーツシュコーチはノービスやジュニアを育てる名人だし」

一緒に軽くウォーミングアップをしながら、カナダに行く話をした。

「あ、でもノリはこっちとは全然違うから、振り落とされないようにな」

「やっぱり、ガンガン突き進む感じなんですか？」

外国のイメージといえばそうだ。信じられないほどのアグレッシブさで、空気を読むことなど考えもせずに前進あるのみ。中沢さんから聞く外国選手は皆そんな感じだ。

「アメリカほどじゃないけど、そういうところはある。それでいて抜けてるから、気負っていると変なところでストンと落ちてがっくりする」

わかったようなわからないような例えだった。

「ま、こういうのは行ってみればわかるよ。一ヶ月ならちょうどいい長さだと思うし」

「英語がちょっと不安です」

「お母さんがレッスンしてくれてるんだろ？」

「そうですね……」

話せないということはない。おかげで英語の成績はいつもトップ

だ。

中沢さんはちょっと考えた顔をした後、急に英語でしゃべりだした。

『君の得意なジャンプは？』

さすが本場に行っているだけあって、母よりも発音がうまい。

『えっと、フリップ。これだけは失敗しない自信があります』

『エッジも完璧？』

『コーチは大丈夫って言ってますけど……』

ルッツとフリップは、同じ、左足を軸に右足のつま先について跳ぶジャンプ。ブレードのエッジが外向きなのがルッツ、内向きなのがフリップ。その違いだけで、身体にかかる回転の力は真逆になる。だから違いをはっきりさせないと、間違ったエッジとして減点される。ルッツの練習を始めてから、フリップも何度か修正はされた。でも、最近はなにか言われることはほとんどない。去年出た全日本ノービスでも、エッジエラーはつけられなかった。

『じゃあ心配ないね。逆に不安なジャンプは？』

『ルッツと……ループがあんまり得意じゃないです』

ルッツはまだ不安定だ。まだかかるだろうから、焦らず練習するようにコーチも言っている。

ループは、ルッツほどの難易度ではないけど、勢いが付けにくいジャンプで、トップ選手でも苦手な人が少なくない。逆にとても得意な人もいる。残念ながら、俺はその仲間には入れない。

『ループは苦手な人が多いからな。練習するうちに跳べるようになってくるよ』

そこまで言って、はい、終わり、と中沢選手は日本語で言った。

『普通にしゃべれるじゃん』

『そうですか？』

「合宿くらいなら問題ないレベルだな。それに、そんなに心配することないと思うよ。一月もいたら慣れるし、こういう合宿の子は色々な国から集まるから。英語でからかってくる奴がいたら、英語以

外しゃべれないくせにって言ってやれば良い」

「カナダならフランス語が話せるかも……」

「大丈夫、ちゃんとフランス語を勉強してるような奴はそんな嫌味言わない」

実に頼もしいお言葉だった。

「それに、浩正、フランス語も習ってるんだろ？」

「ちよつとだけですけど」

簡単な言い回しとか、ごくごく基本的なことを、時々教えてもらうだけだ。習っているとは言えない。

「相手がフランス語でなにか言ってきて、わかんなかったら、俺のフランス語はフランス仕込みだからカナダの訛った方言なんてわからないね、って言ってやれ」

「……それって、喧嘩売ってませんか？」

不安になって聞くと、売ってるな、と中沢さんは楽しそうに笑った。

「そんなに深刻になることないよ。何事もリラックスだ」

からかわれていただけらしい。

「せつかくのカナダなんだから、気楽に行けよ。スケ連の推薦でもないんだしさ」

「はい」

「ほら、いちいちそんなに真面目になるな」

リラックスリラックス、と言いながら、中沢さんは軽く俺の背中をはたいた。

「……それに、ひよつとしたら、お父さんに会えるかもしれないよ？」

「え……どうして」

思いもしなかったことを言われて、俺は思わず睨む勢いで中沢さんを見上げた。

生まれてから、俺は一度も父親に会ったことがない。見たこともなければ、話に聞いたこともない。

わかるのは、多分アングロサクソン系の外国人だということくらいだ。俺の顔を見れば、それは一目でわかる。

「だって、浩正のお父さんって、アメリカか、カナダか、イギリスか、ってところだろ。まあオーストラリアとかもありえるけど……一月もカナダに行ったら、ばったり顔をあわせることもあるかもしれない」

「そうでしょうか……」

ありえなさそうな話だった。世界は広く、俺は父親の顔すら知らない。外国で過ごす一月はきっと長くなるだろうけど、たいていはリンクで練習だ。たとえ俺の父がカナダ人だとしても、偶然会うことなんてなかなかないだろう。スケート関係者でもない限り。もちろん、俺だって、その可能性があることは、わかっているけど。

「ひよっとしたらな。俺のこういふ勘は結構当たるんだ」

自信のなさそうな俺に、中沢さんはウィンクした。確かに、勘が鋭くて、ジャパニーズニンジャと言われたという話は、何度か聞いた。

「それなら、ありえるかもしれませぬ」

中沢さんはむやみに自慢をする人ではないので、俺は素直に頷いた。でも、俺は父に会いたいとは思っていないので、気乗りしなさそうな声になってしまった。

「気が進まなさそうだな」

中沢さんは気分を害したふうでもなく、少し心配そうに、俺の顔を覗き込んだ。帰ってくるたび、彼は背が高くなる。そろそろ180に届くんじやないだろうか。

「あまり、俺の父親に会いたいとは思わないので」

父親不在の家庭で、一目でハーフとわかる顔立ちということ、母は申し訳なく思っているみたいだけど、俺は特に気にしていない。母さんはいつも俺のことを考えてくれてるし、俺の世界に、何か欠けていると思ったことは一度もない。

気にならないといえば嘘になる。でも、会いたいとは思わない。

母が、きつと悲しむからだ。多分、母は今でも父のことを愛している。父に関する話題になると、とても優しい表情になるけど、いつもどこか悲しそうでもあった。きつと、会おうと思っても会えない人だ。そんな人に会いたいなんて言ったら、母さんは辛いだろう。

「……そうか。悪いこと言ったな」

「いえ」

親切で言ってくれたことはわかっていた。俺は、顔も知らない父のことを悪く言ったことはないし、父に対して持っている、複雑な気持ちを説明したこともない。外から見たら、あまり気にしていないように見えるのだろう。

「ま、それを抜きにしても、海外で練習するのは楽しいよ。にしても、スケーティング速くなったな！」

重い空気を振り払うように、中沢さんはこつと笑った。つられて俺も笑顔になる。

「はい。俺も今ちょっとびっくりしてます」

一緒に滑っていて、ここまで中沢さんについてこれたのは初めてだった。中沢さんはジュニアのトップクラスにいる人だ。当然滑るのも速くて、去年帰ってきた時なんて、すぐに置いて行かれてしまった。でも、今回は大分ついていけるようになってる。

「ドリーツシュコーチのところは綺麗で速い奴ばっかだからな。もつと上手くなって帰って来いよ」

「はい、楽しみにしてます！」

父親なんてどうでもいい。知りもしない人に会うより、スケートがうまくなって帰ってくるほうが、母さんはきつと喜んでくれるだろう。

中学生。一人でカナダに一ヶ月。

世界中から集まった優秀な子どもと競うことを抜きにしても、なかなかの冒険だ。

中には合宿についていく親もいるそうだけど、仕事がある母さんにそんなことはできっこない。出発当日の朝、成田に見送りに来るのが精一杯だ。

「毎日メールは送ってね。辛いことがあったら言うのよ」

航空会社のカウンターの前で、既に5回は言ったことを母はもう一度繰り返し返した。基本的に俺に対しては放任主義の母も、今日はさすがに不安そうだ。

「そしたらカナダに飛んできてくれるの？」

わくわくする気持ちも強いけど、全く不安がないわけじゃなかった。母を試すように聞いてみる。

「もちろんよ」

母が微笑む。もちろん、大怪我でもしない限り、忙しい母が飛んでくるなんて無理だろう。こんなの冗談みたいなものだ。それはわかっていたけど、当たり前のように頷いてくれたのが嬉しかった。たわいの冗談に2人で笑って、俺はやってきた航空会社の係員に伴われて出国ゲートをくぐった。トロントに着くまではこうして航空会社の子供サービスがあつて、向こうの空港で迎えに会うまで面倒を見てくれる。道中の不安はない。

不安があるとしたら、合宿が始まった後のことだけだ。

合宿は、微妙な緊張の中で始まった。

世界中から集まった、ノービスからジュニアの選手。裏返して言えばこれからのライバルだ。お互いギスギスした空気にならないわけがない。俺は自分の練習に集中した。他の奴らとは、必要以上に

関わらないように気をつけた。というか、英語を使うしかない状況では、交流より、ひたすら練習をするほうが楽だ。

二三日も滑ってくれば、おのずと実力の差は見えってくる。特にずば抜けてジャンプが上手い何人かには、自然と注目が集まった。俺は、ジャンプの難易度は飛び抜けていない。トリプルアクセルは一年くらい練習しているけどほとんど成功しないし、ルッツもまだまだ怪しい。代わりに、ジャンプの流れや幅、そして、年のわりに表現力が高いことが評価されていた。でも、そういうのは子供同士では見えづらいことだ。だから、はじめのうちは、やっかみの視線にはあまり煩わされずに済んだ。

四日目。俺はドーリツシュコーチに話しかけられた。今まで、ローテーションで指導してもらうことはあったけど、勝手に練習しているときに、わざわざ声をかけられるのは初めてだ。ドーリツシュコーチは、いかにも北米の女性らしく、太った、いや、ふくよかな女性で、おっとりした穏やかな雰囲気を漂わせている。でも、何人ものメダリストを育てた名コーチだ。俺はかなり緊張した。

「ヒロマサだったかしら」

「はい、ミセス・ドーリツシュ。覚えていただけて光栄です」

四角四面な俺の答えに、コーチはからからと笑った。

「そんなに硬くならないで。リザと呼んでね」

コーチは俺を安心させるように気さくに微笑んで、視線を合わせるために少し腰を落とした。横にも広い体型のせいで、並んでみるとわからないけど、結構背の高い人だ。現役の時はアイスダンスの選手だったという。シングルはジャンプを跳ぶから、男女ともに小柄な人が多いけど、ジャンプのないアイスダンスは皆背が高い。

「ヒロマサ、12歳だったわね」

「はい」

「すばらしい表現力だわ。ジャンプもスピンもステップも、端整で美しいし、なにより、スケートティングが素晴らしいわね」

「ありがとうございます」

ゆっくりめの英語を聞いて、俺はにかんだ。手放しで褒めてもらえるのは、少し照れる。

しばらく話した後、少し指導をしてもらった。

「そう、そのまま、背筋は良いけど、前に傾いちゃダメよ。ほら傾いた。まっすぐ！」

優しそうで安心感たっぷりの外見に反して、リザの要求はなかなか厳しかった。でも、フィギュアのコーチなんて皆こんなものだ。ようやくリザの満足するポジションのまま、スピードを出せるようになった時には、俺はかなりへとへとになっていた。

「うん、基礎がいいから飲み込みも早いわね。助かるわ。この調子で頑張つてね」

「はい」

疲れていたけど、素直に返事をした。うんうんと嬉しそうに頷き、リザは歩き出そうとして、また俺を見た。

「……ヒロマサ」

少しためらうように、リザは聞いた。

「あなた、ジャステイン・ハリスは知ってる？」

「もちろんです」

ちよつと前の選手だけど、知らないわけがない。スケーティングとスピンが綺麗な人だ。確かカナダ人で、世界選手権で優勝したことがある。オリンピックのメダルも持っていたはずだ。

「彼の演技、好き？」

唐突だったから、うまく答えられなかった。

「それなりに」

最近の選手じゃない。もちろん素晴らしい人だけど、ゼレノフとか、アンダーソンとか、あるいは同じカナダでももつと最近のプライスとかに比べると、印象は薄くなる。オリンピックで優勝したわけでもないし、日本のシヨールに来て滑ることもほとんどない。でも、どちらかという好きな選手だ。目の前にいるドーリツシュコーチの一番弟子だということも知っていた。彼女一番の教え子に対して、

もう少し賞賛すべきだったかもしれない。けれど、俺の返答は、逆にリザの興味を惹いたようだった。

「一番ではない？」

「好きですけど……彼の演技をみると、いつも少しもやもやしたものを感じて。……すみません、上手く説明できません」

「いえ、いいのよ。答えにくいことを聞いてごめんなさいね」

そう言って、リザは俺の頭に手を置いた。

その日の夕食。俺はそれまでと同じように、一人で食べていた。

一人は慣れている。母はなんとか夕食までに帰ってこようとするけど、できないこともしょっちゅうだった。学校も顔のせいでちょっと浮きがちで、俺も進んで仲良くしようとしてもしないから、一人でいることは多かった。そういう境遇を学校の先生は心配しているみたいだけど、俺はその半分も気にしていなかった。いじめられるわけじゃないし、だいたい、放課後はいつも練習に直行だ。友達がいても遊ぶ暇がない。だから、カナダでも他がわいわい騒ぐ中、俺は一人でパンをちぎっていた。そんなところに、同じくらいの年の子がやってきて、隣にトレーを置いた。

「うっ、いい？」

濃い茶色の髪に、ちょっと緑がかった黄色の目。丸い顔にいたずらっぽい表情を浮かべて、俺の反応をうかがっていた。目が合うとぱっと笑顔が広がる。いかにもこっちの子らしい、物怖じしない性格みたいだ。他に席はいくらかでもある。

「どうぞ」

俺はパンをちぎる手を止めて、隣を指し示した。パンばかりだと口が乾くけど、リゾットは味付けが下手でまずい、パスタは茹で過ぎでまずい。この合宿で唯一俺が文句を言いたいののは、ご飯だった。母の手料理が恋しくてたまらない。

「ありがとう」

ちよっと乱暴にトレーを置いて隣に座ると、その子は食事に手を

つけないで、まず俺を向いた。

「君、ヒロマサだよな」

「うん」

「俺はウィリアム・トンプソン。よろしく」

「ヒロマサ・フジワラだ。こちらこそ、よろしく」

もう一度手を止めて、軽く握手をする。ようやくスプーンをとって、彼はニツと笑った。

「ヒロマサ、日本人なの？ 全然そうは見えないけど」

「よく言われる。でも正真正銘日本人だよ」

さて、お返しに俺も聞くべきだろうか。トンプソンという苗字は、スケート界では有名だ。デヴィッド・トンプソン。ジャスティン・ハリスよりも一世代前のスケーターだ。ジャンプとステップがすぐくて、オリンピックで2回メダルを取っている。その後も結構長いこと、プロとして色んなショーに出ていた。さすがにプロを退いてからも結構経つけど、顔は覚えていた。カナダのテレビで解説もしているし、とにかく有名人なのだ。目の前の少年は、その面影がある。そして同じ苗字。俺はちょっと彼の顔を見た。何かを期待しているように、ニコニコと俺の言葉を待っている。聞いたほうがいいらしい。

「ウィリアム、デヴィッド・トンプソンの親戚か何か？ すごく

そう見えるけど」

「ウィルでいいよ。その通り！ 三番目の息子だ。やっぱわかる？」

「似てるから」

「よく言われる。正真正銘デヴィッドの息子さ」

彼があまりにわざとらしく胸を張るので、俺は嘖き出した。仲良くやれそうな相手だった。

お互いにひとしきり笑いあった後、ウィルは俺に顔を寄せて、小さい声で言った。

「君、リザに気に入られただろ」

「昼間の練習のことだ。」

「よく見てるな。ちよつと話しかけられたただだよ」

「君、俺のことまったく知らなくて無関心そうだったし、面白そう
な奴だと思って見てたんだ。スピン綺麗だしね」

「それはどうも」

大人に一番よく褒められるのはスケーティングの良さだ。次にス
ピン。でも同年代の子は、大抵スピンのことしか言わない。

ウィリアムはようやく食事に手をつける気になったらしく、フォ
ークにミートソースのパスタを巻きつけた。一口食べて、やっぱり
茹で過ぎ、と呟く。カナダ人皆がパスタの正しい茹で方を知らない
わけじゃないらしい。べちゃつとしたパスタを飲み込んで、ウィリ
アムはフォークを上向きに持ったまま、物知りげに振りながら、言
った。

「保証してやる。絶対、君、気に入られたよ」

「なにか根拠でも？」

「じーっと君のこと見てたもん。俺、リザとの付き合いは長いんだ」
ウィルはちよつと偉そうに言った。

「元タドーリツシユコーチに教わっているんだ？」

「うん。5歳の時から。俺、父さんに教わるのは絶対ヤダ、って言
つたら、ああ俺もお前を教える暇はない、ってここに放りこまれた」
5歳というのは、スケートを本格的に始める年齢としても、かな
り早いほうだ。俺もそのくらいだったけど、コーチは8歳の時に変
わっている。ウィルが「付き合いが長い」と胸を張るのも当然だっ
た。

「ミスター・トンブソンがコーチするの、嫌なの？」

シヨースケーターとしての活動が忙しかったから、コーチ業では
あまり実績を残していないけど、振付師としては結構有名だ。なに
より、世界チャンピオンで五輪メダリストのコーチなんて、誰でも
ちよつとは憧れる。

「嫌だね」

ウィルは断固として言い切った。

「ただでさえ、どこ行ってもああトンプソンジュニアね、って言われるのに、父さんが後ろにくっついてみるよ。視線みーんな父さんが独り占めだぜ。主役は俺だったの」

目立ちたがり屋らしい。まあ、フィギュアスケート選手なんて、皆その傾向はある。

「ウィル、目立ってたよ。ミスター・トンプソンに負けないくらい」
「なんだ、知らんぷりしてたくせに、ちゃんと見てたんだ？」

「リンクのど真ん中でトリプルアクセルを跳んでたらね」

ちよっぴり回転は足りなかったけど、このクラスで跳べる奴はほとんどいない。目立って当たり前だ。でも、それを置いても、滑っているだけで人目を引きつけるような華やかさがあつた。生まれつきのものなのだろう。

それを言うと、ウィルは少しはにかんで、ありがと、と言った。

「お前、いい奴だな」

「褒められるほどじゃないよ」

そう率直に言われると、俺まで照れる。

その後は、好きな選手や音楽の話で盛り上がった。ウィルは、4回転をバンバン跳んで、激しいリズムで踊り狂うような、男らしい演技が好みらしい。俺の好きなタイプとは正反対だ。ちよつと古い選手が好きだということ以外、趣味はそれほど合うとはいえなかったけど、俺はここに来て、ようやくリラックスした気分になれた。

翌日から、俺はウィルの言葉が正しかったことを知った。

次の日も、その次の日も、自由練習中に、リザは俺を構いに来た。彼女の指導は的確で、日本のコーチとは違う視点を鋭く突いてくる。リザのアドバイスで、今までできなかったことができるようになるのが、面白くてたまらなかった。母さんに電話で報告すると、弾んだ声でおめでとうと言われたのも、嬉しかった。

面倒な副作用としては、周りの視線が次第に変わりはじめたことだった。下手に出て俺に近づこうとする奴もいたし、逆に敵意をむき出しにしてくる奴もいた。コーチのお気に入りになったせいで面倒が起ころるのは、これが初めてじゃない。むしろ慣れている。でも、日本はほとんどが女の子で、今回はそうじゃない。相手は皆直接のライバルなのだ。女の子相手と同じ対応をするわけにはいかなかった。かなりストレスがたまった。同じ立場のウィルも最初から注目されていたけど、同時にトンプソンの息子だということもとくに広まっていた。だから、誰も手出しはできなかった。それだけが原因じゃないだろうけれど、いつも気楽そうで、少し羨ましかった。

来る日も来る日もスケート漬けだった。週に半日だけ休みがあつて、その時は皆でアクティビティでサッカーをしたり、トッブスケーターの演技を見たりした。でもそれ以外の時間はとにかく練習、練習、また練習だ。自分がリンクを使えない時間も、もちろん陸上訓練がある。遊ぶ暇なんてない。その甲斐あつて、俺は着実にうまくなった。コーチの言うとおり、とても価値のある合宿だ。普段の練習の何倍ものスピードで、何もかもが上手くなっている気がした。

もうすぐ合宿も終わろうとする頃のある日のこと、来客がリンクを訪れた。俺はちょうどリザに指導を受けている最中で、集中のあまり、ざわめきがこちらに伝わってくるまで、気づきもしなかった。

「リザ。来たよ」

少し低い声だった。俺は目を丸くしてその人を見つめた。もう40を超えているはずだけど、ちっともそうは見えない。そして、動画で見るよりハンサムだ。思わず神様の不公平さを呪いたくなるくらい、整った顔立ちをしている。

ジャスティン・ハリス。俺の尊敬するスケーターの一人だ。この前リザと話した後、部屋に戻って調べたところによると、ジャスティンというのは通称で、本名はジャスティニアンと言って、東ローマの有名な皇帝から取っているらしい。でも、俺も最初からジャスティンのほうしか知らなかったように、大抵はジャスティンと呼ばれている。

「ジェイ」

呼ばれたリザが俺に落としていた視線を上げる。それを見て、ジャスティン・ハリスは肩をすくめた。

「ちよつと悪いタイミングで来ちゃった？」

「少しね」

「その子、新しく取った子？」

「うっん、合宿」

「そうなの？ ウイルのライバルを探してきたのかと思ったよ」

「バカ言わないで。ヒロマサと言って、日本から来ているの」

へえ、とちよつと驚いたように、ミスター・ハリスは片眉を上げた。た。

「日本の子なのに、ジャンプに偏ってないのは珍しいね」

それは、日本でもよく聞かされたし、ここに来てからも、何度か言われた評価だった。男子に限らず、一流選手を目指す日本のスケーターは、どうもジャンプにばかり熱心になる傾向がある。中学生くらいのうちは特にそうだ。しつこい基礎の練習もあまり嫌がない俺は、かなりまれな子供だった。

「なんだ、結構見てたの」

「ウイルスに捕まって。遠目に、しばらく見てたんだ。良いスケーター

イングしてるし、スピニングが綺麗だ。カナダ選手じゃないのが残念だよ」

急に頬に熱が集まったような気がして、俺はうつむいた。見えないけど、上から、かすかに笑う気配がする。

「そういえば、確かに日本でジャンプ偏重じゃない若手は珍しいわね」

暗に理由を聞かれて、俺はなるべくミスター・ハリスを見ないよううにして答えた。

「母が、スケート好きなんですけど、スケーティングとスピニングが好きらしくて、その二つがうまくなると、特に喜んでくれて」

これをやりなさい、あれをやりなさいと、母が言ったことは、一度もない。何が上達しても、いつも褒めてくれるし、できなくても怒らず、優しく慰めてくれる。でも、特に嬉しがってる時は見ていてわかるから、もつと喜んで欲しくて、頑張った。

「ワオ、素晴らしい母親ね。昔誰かさんのファンだったんでしょうね、多分」

いたずらっぽく、リザはミスター・ハリスを見た。

やめてよ、と笑って、ミスター・ハリスは俺に手を差し出した。

「はじめまして。僕はジャスティン・ハリス。よろしくね」

にこ、と録画で何度も見た、優しいな笑顔がまっすぐ俺に向けられる。グレーの瞳が、柔らかく光っていた。スターの笑顔を真正面から見るのは、なんだかすごく恥ずかしかった。でも、ここで目を逸らしたら、きつととんでもない礼儀知らずだと思われる。俺はなんとか、にっこり笑う目の前の人を見て、その手を握り返した。うるさいくらい、心臓がドキドキと鳴っている気がした。

「ヒロマサ・フジワラです。よろしくお願いします」

俺より二まわりくらい大きな手は、母のようには柔らかくなかった。でも、とても暖かくて、優しかった。

日本よりはるかに過ごしやすい夏の一月は、毎日がみっちり詰ま

っついて、ひどく長かった。

俺はウイルの紹介で、ちよつとずつ知り合いができて、一人で食事をすることもなくなった。言葉はうまく通じないし、話題もよくついていけないくなるけど、一人で食べるよりは楽しかった。俺がついていけない、という顔を見ると、そんなことも知らないのかと言いながら、ウイルもその友達も、あれこれと説明をしてくれた。それも最初は全部はわからなかったけど、すぐに慣れた。

明日が最後という日の夜、俺は飲み物を買いに、外へ出た。スタンドに着くと、知った顔がいた。ウイルに紹介されたことがある。ウイルの友達はほとんどがオンタリオ州の外か海外から来ていて、彼もそうだった。出身はフランスで、英語はあまりできない。ちゃんと話したことはほとんどなかった。できた飲み物を受け取って、彼は俺の方を見た。

グッド・イブニング、と彼はフランス語訛りの英語で言った。俺も礼儀正しく、同じように返す。そのまま先に帰らず、彼は俺がティーを注文して受け取るのを見ていた。

「明日で最後だな」

店員からカップを受け取って彼の方を見ると、ゆっくりした英語で、彼はそう言った。俺よりはマシな英語だ。俺はちよつと考えてから、口を開いた。

『うん、なにかスペシャルなことがあるのかな』

彼の英語よりさらにゆっくりのフランス語で答えると、彼は目を丸くして、早口でなにか言った。聞き取れた単語では、君フランス語喋れたのか、とかそういうことだ。

『ちよつとだけだよ、ちよつとだけ』

指で隙間を作って、ほんの少し、ということを強調する。

『びっくりさせるなよ……日本人って天才なのかと思った』

この年で三ヶ国語ができれば、確かにすごい。

『スペシャルなことなこつて、多分、有名な選手はくるとおもっ
ぜ』

『ムツシユー・ブラウン?』

有名な選手と聞いて、俺は今のカナダの一番手をあげた。彼は軽く首を振る。

『引退した選手だよ。去年はジャスティンだった』

言われて、優しげなグレーの瞳の持ち主を思い出した。

こないだ来てたよね、と言いたいけど、フランス語が上手く出てこない。

「こないだ、来てたよね」

しかたなく英語に戻すと、彼はちよつと笑った。

「ああ。リザの教え子だからだと思う。俺は話したことないけど」

「俺、この前ちよつと話したよ」

「本当に?」

いいな、という顔で俺を見た後、彼は言葉を探るようにして、ちよつと上を見た。

『幸運だな』

幸運という英語がわからなかったらしい。俺はさっきの彼と同じように、軽く笑って、そうだね、とフランス語で答えた。

お互いの部屋に帰るまでの道を、英語とフランス語ごちゃ混ぜで話しながら戻った。特に意味のあることを話したわけじゃないけど、一人で夜を過ごすんじゃない、スケートを習っている男の子とお喋りする時間があるのは楽しかった。

最後の日は豪華だった。まず、有名人がやってきた。ジャスティンは忙しくて来れなかったけど、小さいころオリンピックで見た、ジャクソン・プライス。それからウィルの父親の、デヴィッド・トンプソン。となりのリンクで練習している、ジュニアのトップ選手たちを見るのがメインだったらいいけど、ついでに俺たちも見てくれた。彼らの前で、ひとりずつフリーのプログラムを滑らなければならぬと聞かされたのは、当日の朝だった。心臓が爆発するかと思った。ウィルも知らなかったらしい。今までの人生で同じくらい

緊張したのは、去年の全日本ノービスで、客席にオリンピックメダリストの田中選手を見つけた時くらいだ。でも、俺はなんとか滑りきった。苦手のループはダブルになったけど、他にミスはなかった。ひゅう、とジャクソンが口笛を吹いて、すごいスケイティングだ、俺が15の時より上手いな、と言ってくれたのに、緊張でお礼も言えなかった。

最後にプライスが昔のフリープログラムをまるまる滑ってくれた。もうトリプルアクセルは跳べなくて、技術で言えばジュニアのトップの選手のほうがすごかった。でも、やっぱりオリンピックメダリストはすごかった。氷に吸いつくようなスケイティングとか、リンクの端から端まで一瞬で滑っていくスピードとか、少しもぶれないスピンとか、そういうのだけではなくて、彼が氷の真ん中にたつたとたん、言葉では表せない、雰囲気みたいなものが俺たちの目を釘付けにして離さなかった。彼が滑り終わってしばらくしても、俺は口を聞くのを忘れていて、ウィリアムに笑われた。でも、彼も他の子も、プライスの演技の間、ばかみたいに口を開けていた。この合宿で、俺はすごくスケートが上手くなったつもりだったけど、一流の選手になるにはまだ途方もない距離があると、最後の最後に思い知らされた。もし俺たちがそう思うのを見越して最後にプライスの演技を間近で見たのなら、リザって、鬼だ。夜の打ち上げパーティーまでの間、荷物の片付けをしながら、俺はそう思った。

打ち上げパーティーの会場で、俺はウィルや、ほかの奴らと喋りつつ、適当に食事をつまんでいた。まずい食事にもようやく慣れた頃にこの合宿が終わるのは残念だけど、明日には母さんに会える。そう思うと、今すぐにでも飛行機に乗って帰りたくなった。三日に一回くらいはスカイプで連絡していたけど、俺を撫でる手や、抱きしめてくれる暖かさが恋しい。

「ヒロマサ」

パーティーが終わりに差し掛かった頃、俺はリザに話しかけられた。練習中みたいなの、すごく真剣な顔つきをしている。隣には、このリ

ンクで一番古株の、トーマス・ピアソンコーチもいた。

「少し話があるの。今いいかしら」

「はい」

ピアソンコーチはもう高齢で、一部のよく出来る選手以外は指導していない。会うのも話すのも初めてだった。俺は少し緊張して、2人についていった。

会議室のようなところに入って、席に着くと、リザは真面目な顔をして切り出した。

「ヒロマサ、ここで、本格的に習うつもりはない？」

「え？」

「これから先、つまり、こういう集中セミナーじゃなくてね、これからすぐに、このスケートクラブで引き続き練習するつもりはないか、ということよ」

英語が通じなかったと思ったのか、リザは丁寧に説明しなおしてくれた。俺は一言で意味を正しく理解していた。でもあまりにも、意外な言葉だった。気に入られたことはわかっていた。来年も、合宿に来れるかもしれないと、期待もしていた。でもまさか、急に合宿を飛び越えて、ここで続けて習うなんて話になるなんて。

「カナダに引越すってことですか？」

「そうなるわね」

そんなのありえない、と思いながら聞いたのに、リザは大したことででもないようにあっさり言った。

「ちよつと、それは……」

「日本から出るのは気が進まない？ 君はウィルともうまくやっていたし、あまりそういうタイプではないと思っていたわ」

内心舌を巻いた。良く見ている。確かに、俺は海外に馴染みにくいわけじゃない。ここに来てから、日本より海外のほうが、息がしやすいことに気づいた。

「今所属しているコーチもいますし……」

エリザベス・ドーリツシュに比べれば、無名な人だ。俺との相性

もそんなに良い訳じゃないけど、8歳でリンクを変わってからずっと教えてくれた人だし、年齢が上がるほど、コーチ変更は色々な面倒がつきまとうことは知っている。

「こちらからそれなりのオファーは出すわ。結局は君の意思次第よ」
「その、金銭的な問題があります」

話しくい話題だ。でも、外国でははっきりものを言ったほうがいい。この一ヶ月で、俺はそれを学んでいた。

「ヒロマサ、私たちは、それなりの支援をしても構わないとさえ思っているんだ」

ずっと成り行きを見守るだけだったトーマスにそう言われて、俺は黙り込んだ。

「あなたは素晴らしい才能の持ち主だわ。確かにミキナコーチも良い人だと聞いているけど、遠くないうちにあなたは彼女の手に負えるレベルを超えていくと思うの。それに、あなたの持ち味は、日本選手の中ではかなり独特よ。私たちは、それを存分に伸ばしていきたいと思ってる。私たちはあなたのような選手を今まで何人も育ててきた。その経験を生かせば、きっと他のどのコーチよりもあなたの才能を伸ばせると思う」

「今までの日本選手にはないタイプ」

日本でも、ここでも、俺は何度もそう言われてきた。顔立ちが日本人離れしているからそう言われるのだと思ってたけど、それだけじゃないらしいのが、ここに来てわかった。

リザの瞳は、真っ直ぐに俺を見つめている。真剣に俺のことを考えているのが、痛いほど伝わった。

ここまで言われてしまえば、もう本音を晒すしかない。

「俺は、母子家庭なんです。母一人の収入で、スケートを習っています。俺一人でカナダに来ることは難しいでしょう。でも、母と一緒にカナダに来るとなれば、母は仕事を失ってしまう。だから、無理だと思います」

反応を見るのが怖くて、俺は下を向いた。見なくても、2人が黙

り込むのはわかった。

「……ヒロマサ、君、日本人だったわね。立ち入ったことを聞くけれど、君のお母さんは、こちらの人ではない？」

「はい。俺は、父親似らしくて」

「わかったわ」

リザは溜息をついた。

俺もそうしたい気分だった。とても、とても、魅力的な提案だった。確かに、日本は俺にとって、あまり居心地の良い場所とはいえなかった。カナダは肌に合っている。気質も、土地も、コーチも。

「それでも、私たちは君をあきらめ切れない。一度、君のお母さんに相談したいわ。ミキナコーチにも、こちらから連絡はします」

母を困らせたくはなかった。

これがどれほど素晴らしい提案なのか、母はきつとすぐにわかってしまうだろう。そして俺にこの提案を断らせることを、とても心苦しく思うだろう。でも、この提案に乗ることは、もっと母を苦しめることになる。

「……わかりました」

結局俺はうなずいた。

そのまま断ることは、どうしてもできなかった。よくしてくれたリザのためにも、俺自身のためにも。

翌日は帰国だった。来たときと同じ、トロントの外れにあるピアソン空港からの出発だ。空港までは、これも来たときと同じように合宿のスタッフが俺を送るはずだったのに、今、俺は高そうなトヨタの後部座席に座っている。夜寝る前、リザの話でまだ混乱している俺に、ウィルは軽く言い放った。

「明日、空港には俺と父さんが送って行くから」

俺は啞然として、ひらひらと手を振って部屋に戻るウィルを見送った。

何かを聞き間違えたんじゃないかと半信半疑で寝たけど、翌朝本当に、昨日見たばかりの大スターがやってきた。どこをどう見ても、間違いなくデヴィッド・トンプソン。話するのは初めてだった。さすがに緊張した俺を、ウィルとその父親は盛大に笑い飛ばした。「気をつけて帰れよ」

「ああ、色々ありがとう。ミスター・トンプソンも、ありがとう。ございました」

「礼なんか良いって」

ひらひらと手を振るウィルの頭を、お前が言うな、父親がはいた。楽しそうな親子だ。

「じゃ、またな。メール送れよ」

「わかった。会つのは早くて来年だけだ」

「どうかな」。俺は、ヒロカズにはそう遠くないうちにまた会える気がするんだけど

「だろ？」とウィルはいたずらっぽく笑った。リザからなにか聞いているのかもしれない。

「どうだろうな」

空港の立ち話するには込み入った話だ。俺は曖昧に肩をすくめ

た。こつちですっかり身についた仕草だ。

ウィルには、俺の家庭の事情を話していない。隠すことではないけれど、なんとなく話しそびれてしまった。ウィルは一旦喋りだすと止まらないし、話も面白いから、俺はどちらかというところ聞いていることのほうが多かったのだ。

「道中気をつけて。近いうちに会えることを祈っているよ」

それ以上言うな、と言うように、息子の肩にぼんと手を置いて、トンブソン氏は俺に手を差し出した。

「ありがとうございます」

慌てて手を差し出すと、ぎゅっと握り締められた。

力強い感触だった。

ウィルたちと別れた後、また航空会社のスタッフに付き添われて、俺は東京行きの飛行機に乗った。

飛行機が成田に着くのは火曜日の午後だった。今度は半休が取れないらしく、母さんは迎えに来れない。成田からなら俺も自分で帰れるし、むしろありがたかった。二時間も一緒にいれば、母はすぐに俺の様子がおかしいことに気づくだろう。電車の中でカナダ行きの話はしたくない。

成田空港に着くと、こつちのスタッフが待っていて、入国審査と荷物の受け取りを手伝ってくれた。一人で帰るといって、綺麗なお姉さんはニコニコ笑うのをやめて、びっくりした顔で、大丈夫、と聞いた。大丈夫です、と自信たっぷりな顔で答えておいた。迎えに来るよう母さんに電話をされたら困る。心配そうなお姉さんが何度も成田エクスプレスまでの行き方を教えてくれたおかげで、電車に乗るまではスムーズだった。子供ひとりでいるのをじろじろ見られながら座席に落ち着くと、ようやく着いた、という気になった。今さらだけど、12時間のフライトは、本当に長かったし、疲れた。

母に成田エクスプレスに乗ったとメールを送ると、びっくりする

くらいすぐに返事が返って来た。

『東京駅からは予定通りタクシーに乗るのよ。』

今日は8時ごろには帰れそうです。

夕食はお寿司でも頼んでおいて。』

こんなメールも久しぶりだ。いつもの生活に戻ってきたんだな、
と思いながら、返事を打った。

指紋認証を忘れて、玄関でうっかりカードキーを探しそうになっ
てから、家に戻った。ウィルが隣にいたら、何やってんだ、と腹を
抱えて笑いそうだ。一人だと、自分で自分にツッコミを入れるくら
いしか出来ない。久しぶりにドアを開けると、涼しいエレベーター
ホールとは違う熱気と、新しい教室みたいな匂いがむわっと漂って
きた。こっちはまだすごく暑い。真つ先にクーラーのスイッチを入
れた。

すごい疲れが、肩と背中はずっしり乗っかっているみたいだった。
なにもしたくないし、なにも考えたくない。スーツケースを玄関に
置いたまま、ソファに寝っ転がって、テレビをつけた。見慣れた顔
のアナウンサーが真剣な顔でニュースをしゃべっている。カナダの
テレビで見た女のアナウンサーに比べると、随分優しく可愛らし
い感じがする。そういう顔も久しぶりに見るから、なんだか新鮮だ
った。

寿司を呼ぶ以外は、適当にチャンネルを変えながらソファでごろ
ごろしたまま、7時半になった。

母さんは30分早く帰ってきた。走ったのか、息が上がっている。
玄関まで迎えに出た俺の顔を見ると、ふわっと笑顔が広がった。

「おかえり。寿司、まだ届いてないけど」

「大丈夫よ。浩和もおかえりなさい。元氣そうね」

いつもより嬉しそうに、母さんは俺をぎゅっと抱きしめた。シャ
ツ越しに、微かに汗のにおいがした。日本はまだまだ暑いのに、走
ったりするからだ。しかもヒールなのに。

「うん。汗かいたんじゃない？ シャワー浴びたら？」

「そうするわ」

母がシャワーを浴びて着替えている間に、寿司が届いた。俺は話を食後に回すことにした。重たい話をしながら晩ご飯なんて、ろくに味もわからなくなってしまう。せつかくの寿司なのに。

ジュースで乾杯した後、2人で寿司を食べながら、ひとしきり合宿の話をした。

ウィルのこと、リザのこと、練習でできるようになったこと。ウィルは本当に話し上手だ。彼の話をもろごと伝えるだけで、母はころころと笑った。

お互いそろそろ満腹になったあたりで、俺は手を止めた。

「母さん、あのさ、実は大事な話があるんだ」

母は小さくうなずいた。俺が何か重大なことを隠していることを、薄々感じ取っていたらしい。

なあに、と落ち着いて聞き返してくるけれど、ひどく緊張しているのがわかった。

「リザから、カナダに来ないかって言われたんだ」

俺は、続けて一気に言った。

「できる限りの支援はするし、今のコーチとも話をつけるって。母さんの仕事があるから難しいって言ったけど、それでも話してみたいって言われた」

俺が言い終わって口を閉じると、沈黙が落ちた。

母は考え込んでいる。リザに気に入られたことは母さんも知っているけど、ここまでとは思わなかったのだろう。俺だって同じだ。

どれくらい時間が経っただろうか。ひどく長かった気がした。

「……浩和は、どう思っているの」

静かな声で、母は俺に聞いた。困っているときは、いつもそうだ。落ち着いた、静かな声で、まず俺の意思を確かめる。

「……すごく良い提案だと思う。でも、母さんを困らせることも、無理をさせることもしたくない」

「わかったわ。二三日、考えさせてくれる？ それから、ドーリック
シュさんの連絡先を教えて」

「うん」

俺の携帯から、自分の携帯に連絡先を受け取ると、母さんは、少し困ったように微笑んだ。

「合宿、楽しかったのね」

「うん、最終日、プライスが来てさ、目の前で一人ずつフリー滑らされたんだ。当日の朝になってそれ知らされたんだよ、信じられる！？」

それから、また合宿の話に戻った。

思い出は鮮やかで、楽しいものばかりだ。練習はきつくて、毎日夜にはくたくただった。皆と仲良くやれたわけじゃないし、ちょっとした嫌がらせだってあった。でも、ウィルとはいっぱい遊んだし、なにより、ものすごくうまくなった。ウォームアップでプライスが跳んだトリプルアクセルもすごかった。思い返すたび、遠い海の向こうにあるカナダの地はひどく愛しく、そしてここからは、あまりにも遠く思えた。

それからの数日間、母は忙しそうだった。家にいると思ったら、英語で長電話をしていることもあった。何を話しているか、もちろん気になったけど、母さんのその姿を見ると、すごく悪いことをしているような気持ちになった。だから、リビングで母さんが電話しているのを見つけたら、俺はこっそり部屋に戻った。

日本に帰ってきてからちょうど一週間経った日。

遅くなるけど、起きてるようにメールで言われて、俺は母さんが帰ってくるのを待った。

帰ってくるなり、母は真剣な顔で、俺の前に座った。

「浩和、あなたはリザの提案に乗りたい？」

母さんの視線が、俺に突き刺さる。本心以外のことを答えるのを

許さないようだった。

「……うん」

「今よりずっと辛くなるわよ。出席日数の都合上、日本人学校は難しいと思う。現地の学校に入ることになるわ。勉強も何もかも違うだろうし、お金のかかる私立には入れてあげられない。補習とかも期待できないかもしれない。でも、スケートをしているからって勉強に手を抜くことはできない。わかるわよね？」

「わかってる」

俺はずっとスケートを続けるつもりだし、トップ選手になりたいと思っっている。でも、そう思っている同い年のライバルは世界中にいっぱいいて、その中で実際トップに行けるのはほんの一握りだ。致命的な怪我をするかもしれないし、思ったほど伸びないかもしれない。だから、将来、スケートを離れて普通に生きていくという選択肢を、捨て去ることはできない。

「それでも行きたい？」

否定的なことばかり母さんは言い連ねているというのに、その声は、俺が首を横に振ることなど、予期していないようだった。

母さんは、俺がカナダに行くことと決まった時から、どこかでこの展開を予期していたのかもしれない。まったく根拠はないのに、ふと、そう思った。

「行きたい」

母はゆっくりとうなずいた。

「なら一緒に行きましょう。会社は、4月付けでカナダの支社に移してもらおうことにするわ」

「できるの？」

俺は思わず聞いた。一番の問題が母の仕事だ。そう簡単に解決できることは思っていなかった。

「アメリカの支社よりは希望者も少ないし、行きやすいから、大丈夫よ」

母は気軽そうに言った。俺はまだ不安だったけど、母が大丈夫だ

というのを、これ以上突っ込んで聞くことも出来ない。母の会社のことはよく知らない。カナダに支社があることさえ、たった今知ったのだ。

「春休みになったら引越しね」

俺の髪を撫でて、母は柔らかく笑った。その笑顔を見て、俺も来年の春を心待ちにする気持ちが、じわじわと沸き上がってきた。

「うん」

その夜、ウィルにメールを送ってベッドにもぐりこんだ後も、珍しく、俺は興奮で寝付けなかった。

カナダ。来年の春からは、あの国で練習をするのだ。それは、今まで想像もしてみなかったことだった。うまくしたら、高校に上がる前に一度くらいは合宿に行つて、高校に入ったら毎年夏は海外で練習して、大学生になったら、中沢さんみたいに海外を拠点にできるかもしれない。そんな計画はぼんやりと夢想していたけど、それを一気に飛び越えて、俺は中学生でカナダを拠点に練習するんだ。スケート・カナダにスケート・アメリカ。カナダとアメリカのナショナル。どっちも国際試合並みにレベルが高い。それから、アメリカとカナダ、それぞれのスターズ・オン・アイス。アメリカとカナダは国境線を接していて、トロントはその国境線ギリギリにあるから、気軽にアメリカに行ける。日本だつて負けてないけど、フィギュアスケートの王国は、やっぱり北米だ。

合宿は男子だけだったから、見かける機会はなかったけど、リザが教えてるフランスス・オルコットにもきつと会えるだろう。テレビ越しに見てもすごくすごく綺麗な人だ。

何もかもがあまりに急で、時間が早回しになってるようだった。

……けど、急展開はここで終わったわけじゃなかった。

朝、メールをチェックすると、ウィルから返事が来ていた。「マジかよ、起きたら今すぐスカイプ上がれ」とだけ書いてあった。俺は時計を見た。目が冴えてあまり眠れなかったせいで、起きたのはいつもより早い。1時間くらいなら大丈夫だろう。朝の7時半。カナダは今、夜の6時半だ。晚ご飯の時間だから、出れないかも、と思いつながらネットに上がると、ウィルの方からかかってきた。ぐらつと揺れた画面には一瞬皿らしきもの映っていた。アイフォンをそ

ばに置いて待つていたみたいだ。

「ヒロマサ、こっち来るって？」

ウェブカメラ越しのウィルは興奮していた。目をキラキラさせて、身乗り出している。

「うん」

一夜明けて俺もまだ興奮が抜けきっていなかったけど、ウィルを見てちよつと身を引きかけた。

「だから言っただろー。多分またすぐ会えるって」

「ちよつと無理かなくて思ってたんだ」

「そうか？ でもなんでまた4月なんだよ。学校終わっちゃっせ。もつと早く来れないのか？」

矢継ぎ早にウィルは聞いてくる。

「えつと、まずは落ち着けよ」

これは簡潔に説明したほうが良さそうだ。要点だけ絞って、なるべくさくつと言うことにした。

「言いそびれてたんだけど俺、母子家庭なんだ。母さんが働いてて、それでもそもそもカナダに行くなんて無理だと思ってた」

大きな目を数度瞬かせ、ウィルは黙り込んだ。急にシリアスになるなよ、と苦笑いして、続ける。

「でも母さん、どうにか調整つけたみたいで、カナダ支社に転勤ってことになって、行けることになった。で、日本の会社も学校も3月に終わって、4月に新しい年度が始まるから、行けるのは4月からってわけ」

早く言えよ、とウィルは額に手を当てた。

「言いそびれてたんだよ。ウィルのほうが喋ってばっかだったし」

「勝手なこと言って悪かった」

「気にしなくていいよ」

でも、悪かったよ、とウィルはもう一度言った。

「あのさ、お母さんは仕事があるからしょうがないけど、ヒロマサだけでもこっち来れないの？」

「いくらなんでも俺一人でカナダで暮らすのは無理だろ」

「うちにホームステイするのはどう？ 部屋なら空いてるし、男三人兄弟だから、あと一人増えたってどうってことないよ」

「ウイルが決めることじゃないだろ。一人増えたら色々面倒だぞ。

お前、洗濯とか、料理とか、したことないだろ」

うつ、とウイルは黙り込んだ。凶星らしい。

「でもさー、4月は遅いって……一シーズン後じゃんか……。こつち来たらスケカナもスケアメも見れるし、ワールドもいけるかもしれないしさあ……」

「こつちだつてNHK杯あるし、四大陸も近いよ」

「お母さん、一緒に台湾行く暇あるわけ？」

今度は俺が黙り込む番だった。台湾で開催される四大陸を見に行く時間は、多分ない。

「……しょうがないって。来年にはカナダに行けるんだしさ」

「待てない。8ヶ月だぞ、8ヶ月！」

ウイルは頬を膨らませた。そうしていると小動物みたいだ。普段はどう見ても大型犬なのに。

「実際には7ヶ月くらいだよ。8月もすぐ終わるって」

「でも半年以上ある」

「そついわれてもなあ……」

俺は腕を組んだ。できることなら、俺だつて早く行きたい。

「なあ、要はパパとママが良いって言えばOKなわけだろ？」

ウイルはやつぱりホームステイと言うアイディアを捨てきれないらしい。2人も兄がいるのに、友達を家に住ませたいものなのだろうか。俺はウイルよりちよつと小さいから、弟がほしいのかもしれないけど。

俺はこれ見よがしに溜息をついた。

「お前なあ、デヴィッド・トンプソンの家にホームステイなんて、母さんがOKするわけないだろ。日本人のシャイな性格考えろよ」

「その顔でシャイって言われたってなあ」

「うるさいな。俺だって母さんに似たかったよ」

「ああ、やっぱり父親似なんだ？」

「多分な。会ったないし、写真も見たことないから、顔は知らない」
「ウィルはちよつと眉を寄せた。離婚したとか、死別したとか、そんな感じだと思っていたんだろう。大抵の人はそう想像する。」

「気にすんな。俺も大して気にしたことないから」

「……良くその環境でスケートやってるな」

「俺がやりたいっていったことは、なんとかしてやらせてくれるから。それに、母さんもスケート好きだし」

「スケートファンならウチにホームステイは余計に喜ぶよ、きつとまだ諦めていないらしい。」

俺はため息をついて、丁寧に説明することにした。

「ウィル、母さんにとっては、デヴィッド・トンプソンって言ったら大スターなんだ。そんな人に、自分の子供を預けて手間かけるなんて、申し訳なくてできるわけないよ」

説得力のある説明だと思ったのに、ウィルはそれを聞いても諦めず、何かを考え込んでいた。悪巧みをする顔だ。しばらくしてぱつと笑顔を浮かべたウィルに、俺は嫌な予感がした。

「なら、逆に言えば、こつちがぜひひにと言えば断れないわけだな？」

残念なことに、おそらくそれは事実だ。でも、それを馬鹿正直に言ったらウィルの思うつぼだ。

「どうだろ、あれで母さんはつきりしたところあるから」

「とにかく聞いてくるよ！ ちよつと待ってて」

待てないよ俺は学校に行かないと、と言う間もなく、ぶち、と通信が切れる。俺はまた溜息をついて、まずは朝御飯を食べに行くことにした。

まあ、いい。たった一度会っただけの子供を預かるなんて、普通に承するわけがない。トンプソン夫人は大きなテレビ局のプロデューサーで、トンプソン氏と同じくらい仕事に忙しい人だ。ウィルの我侭は簡単に却下されるだろう。俺はその時はそう思っていた。

しかし、十五分後、かかってきたスカイプに出たのは、ウィルじやなくてトンプソン氏だった。

「やあ、ヒロマサ」

カメラの前に座るなり、トンプソン氏は、軽く軍隊みたいな敬礼をした。相変わらずユーモアにあふれた人だ。

「こんばんは」

「話は聞こえていたよ。カナダに来るんだって？」

やっぱりウィルは食事を中断して喋っていたらしい。俺の話はウィルの家族には全部筒抜けだったようだ。

「はい。来年の4月から、ドーリツシュコーチのところに」

「4月は確かにちよつと先だな」

「母の仕事がありますから」

「ああ。それも聞いた。大したお母上だ。ウィルの提案だがね、君さえよければ私たちは喜んで受け入れるよ」

思わず目をむきそうだった。

こんなややこしそうな話、たかだか十五分で決めてしまうなんて

「……半年も置いていただくのは、あまりに面倒が多いと思います。俺も母も、そんなことはできないかと」

「まあ、確かにあまりもてなすことはできないな。家のことはほとんどハウスキーパーに任せているし、食事はウィルにあわせることになる」

「いえ、そういうことではなくて」

「しかし、お母さんと2人より、勉強の助けにはなるな。ウィルはこれで結構成績が良いんだ。こちらの勉強を教えてやれるだろう」

話を聞けよ、と思った。この強引さは親子そっくりだ。

それは確かに良いことですけど、と俺はもにもよと言った。

「お母さんは今家にいるかい？」

「今は出かけています」

「帰ってきたら連絡をするように頼んでもらえるかな」

つまりは、親同士の話になるから俺は引っ込んでいろ、ということ

とだ。

俺はしぶしぶ承知するほかなかった。

父親の後ろから身を乗り出して、ウィルは満足そうにうなずいていた。お前は楽しいだろうけど、俺の苦勞も考えてほしい。

6 (後書き)

浩正君があげたのは北米で開催される主要なスケート関連イベントです。

スケート・カナダ、スケート・アメリカ……グランプリシリーズ(スケートの主要な国際競技会。10月末～12月中旬)のうち北米で開催される2試合。他は日本(NHK杯)、中国、ロシア、フランス(TEB)。

ナショナル……全国規模の国内選手権。日本で言えば全日本選手権。国際記録には残らないが、世界選手権などの出場者選考に使われるので、スケート大国では重要なイベント。

スターズ・オン・アイス……北米を拠点とするスケートショーツアー。アイスショーとしては最大規模。

どうしようどうしようと思いながら、学校に行つて、授業を受けて、練習に行つた。母には帰つてきてから直接言うことにした。今メールで教えたつて、母さんも仕事がある。何も出来ないなら、仕事を邪魔するようなことはしないほうが良いと思つた。どうなるか気もそぞろで、学校も練習も集中できなかった。

トンブソン家にホームステイ、ウィルといつしよ、カナダ、リザの鬼練習、デヴィッド・トンブソンの家に住む そんなことで頭の中はいつぱいだつた。授業はつまらないミスばかりして、練習ではコーチに怒られた。怒られるのなんて今更珍しいことでもないけど、今はいつもよりずっと辛かつた。カナダに行く話はもう話は伝わつていて、引き止めるようなことを少し言われてきたけど、コーチもいい話だということとはわかつているから、あきらめ気味だつた。8歳から見えてくれた人だ。大会で初めて優勝した時のも、今のコーチになつてからだつた。そんな人を捨てるようにして、他に移つてしまうのが申し訳なくて、ここのところ、少し気まずかつた。この状態がまだ半年以上続くくらいなら、ホームステイしてでもさつさと移つたほうがいいのかもれない。でも、トンブソン家だ。デヴィッド・トンブソン。カナダスケート界の重鎮。単に有名人じゃない。カナダのスケート界の重役でもある人の家に、ホームステイ信じられない。

いつもの何倍も疲れた一日が終わつて、家に帰ると、そう経たないうちに母も帰つてきた。疲れた俺の顔を見て、どうしたの、と母さんはしきりに心配した。そういう自分だつて目の下にはくつきりクマがある。俺は事の次第を話した。さすがに、大抵のことは冷静に受け止める母も、この話には青ざめた。

スカイプで連絡を取る気にはならないらしく デヴィッド・トンブソンと差し向かいで話すのは荷が重過ぎる 母は憂鬱そうな

顔で受話器を取った。

「あ、そうだ、浩正、あなたはどうしたいの？」

プッシュボタンを押しかけてから、思い出したように母は聞いた。母さんの中では、考えるまでもない話だったから、確認するのを忘れていたんだろう。

「そりゃ悪い提案じゃないと思うけど、面倒なことになりそうだよ。遅くなっても4月のほうがいいと思う」

そうね、とうなずいて、母が電話を掛けるのを横目に見て、俺は部屋に戻った。俺が後ろでじっと見ていたら、電話に集中できない。

母はとりあえず断るつもりだろうけど、トン普森氏が乗り気なら、母さんには分が悪い。母は仕事で外国人と交渉することも多いけど、相手が大物スケーターとなれば話は別だ。以前、日本人で初めて世界選手権で優勝したって言う原田選手と会ったとき、母は声が上がっていた。俺も同じくらい緊張したけど、しばらくそれをネタに母さんをはからかったものだから、しまいにはちよつと怒られたのをよく覚えている。そんな母が、トン普森氏相手に自分の意見を押し通すのは難しいだろう。

予想通り、三十分くらいして、俺の部屋にやってきた母は、浮かない顔だった。

「どうだった？」

「少し考えてみてくださいって押し切られちゃったわ」

「そんなことだろうと思ったよ」

「でもやっぱりお断りするしかないわよね」

「うん」

半年も他人の家に住むのは、簡単な話じゃない。ましてや外国だ。ご飯が合わないからと言って帰ってくるわけにも行かないし、日本にいる母にもどうにもできない。ウィルとケンカするかもしれないし、トン普森家の人と性格があわなくて気まずくなるかもしれない。そんなことになったら、俺の将来に取り返しが付かない。

ウィルはしぶとかった。

翌日、なんとリザから母に連絡があった。ウィルが焚きつけたらしい。

さすがにリザはウィルやトンプソン氏より慎重で、ホームステイが簡単なことではないとはわかっているわ、とまず理解を示したけど、かなり乗り気だった。俺に少しでも早くカナダに来てほしいらしい。

リザという外堀を埋められて、母は少し参ったようだった。でも、俺も母もあくまで断るつもりには変わらなかった。

しかし、俺はカナダ人の強引さと言うものを思い知ることになる。夜、ウィルからスカイプで連絡があった。向こうは朝の7時。かなり早い時間だ。繋げてみると出たのはトンプソン氏だった。その時点で嫌な予感はしたけど、ここでさよならと接続を切って逃げられるほど、俺は勇敢じゃない。

「ヒロマサ、少しいいかな」

「はい」

ちっともよくないが、こう答えるしかない。

「お母さんはわかるが、君自身も我が家に滞在することにはあまり乗り気じゃないようだね」

「光栄なお誘いだとは思いますが、半年も外国となると、面倒ごともありそうですし」

面倒ごとを起こさずに過ごす方法はある。俺が極力気を使えば良い。トンプソン氏にも、夫人にも、ウィルにも。でもそれは、そうとう消耗するだろう。他人の家で小さくなって半年を過ごすくらいなら、遅くなっても来年のほうが良い。

「察しはつくよ。お母さんもそれを心配していた」

トンプソン氏はうなずいた。俺は少しほっとした。さすがに、様々な問題を考慮しなかったわけではないらしい。

「ただヒロマサ、君はお母さんをとても気遣っているようだが、こう考えたことはないかい？」

「何でしょう」

雲行きが怪しくなってきた。流されないぞ、と思いながら、俺は慎重に聞き返した。

「来年4月、君がお母さんと一緒にこちらに移ってきたとする。そうすると、二人一緒に新生活だ。お母さんは新しい仕事に慣れる中で、君が新しい環境に馴染めているかも、いちいち気にしななければならぬ。それはあまりに負担が重いと思わないか？」

「……確かに」

「それに比べたら、君が先にこちらに来たほうが、来年お母さんが移ってきた時、気が楽だろう。もしかしたら、君がお母さんを手助けすることもできるかもしれない」

正論だった。

「確かに君は少し大変かもしれない。しかし、ウィルの大事な友達だ。私たちも可能な限りフォローするよ。信じてくれ」

母の顔が浮かんだ。今頃、どう断るか、一人で悩んでいるだろう。これ以上困らせたくはない。カナダに引っ越すだけでも、きっと母には膨大な負担がかかっている。

トンブソン氏の勝利だった。いや、俺が母さんを大切にしていると、彼に入れ知恵したウィルの勝利か。

悔し紛れに内心舌打ちをして、俺は了承の返事をした。

7 (後書き)

ちよつと短め。

次からよつやく本編モードです。

9月。

慌しくビザ手続と荷造りを終えた俺は、再びピアソン空港に降り立った。学期の始まりには間に合わなかったけれど、驚異的な速さだったことには変わりない。リザやトンプソン氏が、手続きで色々口を添えてくれたおかげだ。

「ヒロマサ！」

ゲートをくぐると、俺がウイルを見つける前に、ウイルが俺のほうに駆け寄ってきた。飛行機がこちらに着いたのは午後4時前。こちらで待機している航空会社の係員を探して、入国手続きや荷物のピックアップを手伝ってもらった後、ようやく出てきたから、時刻は5時半を回っていた。夕暮れ時だ。9月のカナダはもう肌寒い。ウイルがぎゅっと俺に抱きつくと、体温が伝わって、粟立っていた肌が落ち着いた。

ここまで着いてきてくれた係員のお姉さんに、傍にいたウイルのお兄さんが俺の迎えだと言うと、彼女は身分証の提示を求めた。お兄さんが首に下げたままの社員証を見せると、お姉さんはようやく納得したのか、俺にこっと笑いかけた後、帰って行った。その間、ウイルは「会いたかったぜー」と言いながら俺に抱きついたままだ。たったのひと月ぶりなのに、ウイルは大げさすぎる。

「1ヶ月ぶりだな、ウイル。迎えに来てくれてありがとう。リチャードさんも」

トンプソン氏は時間が取れないというので、迎えに来てくれたのはウイルのお兄さんだ。車も、前に見たトヨタじゃなくて、BMWだった。トンプソン家をつくづくセレブだと思った。

「ウイルの友達なのに随分礼儀正しいな。はじめまして、ヒロマサ。これから半年間よろしくな」

「よろしくお願ひします」

俺たちが握手を交わす横で、俺の友達なのによってどういう意味だよ、とウィルはお兄さんに噛み付いていた。

でも、ウィルは彼なりに色々俺のことを気遣っていた。その夜、晩ご飯は一家揃ってだったけど、普通の家庭料理で、あまり時間もかからなかった。ひよっとしたら初日は外食に連れていかれるかもしれないから、その心の準備をしておくように母に言われていたもので、覚悟はしていたけど、そんなことがなくてほっとした。もうひとつの心配は、母さんが悩みに悩んで選び抜いた手土産だった。みんなの前で開けられるて、相変わらずうまいとは言えない英語で、感想にいちいちお礼を言うのは結構なプレッシャーだ。でも、これも起こらなかった。こちらの人はプレゼントを目の前で開けて、喜んで見せるのが普通らしいから、ウィルが気を使ってくれたんだらう。

晩ご飯の後、自己紹介みたいにウィルのお兄さんたちに色々聞かれたけど、9時になるちょっと前くらいから、ウィルがちらちら時計を見始めて、9時になったとたん、もう9時だ。ヒロマサ、疲れてるだろ。そろそろ寝る？と口を挟んできた。あまりにもわかりやすかったから、次兄のエドワードさんなんかは、必死に笑うのを我慢して、後ろを向いていた。でも、その気遣いはとてもありがたかったから、俺は皆にお礼を言って、部屋で休ませてもらうことにした。

ベッドに入っても、落ち着かなくて中々眠れなかったけれど、一人になると、肩から力が抜けた。

今日は金曜日。週末で時差ぼけを調整して、月曜からはもう学校に行くことになる。スケートはとりあえず来週末から、ということになっている。ダンスのレッスンはもう一週間後からだ。

月曜日、俺はウィルと一緒に学校に向かった。学校はウィルと同じところになった。カナダの学校は学区制で、ホームステイとはいえ同じ家に住むんだから、当たり前といえば当たり前だ。土地の値

段がほぼ学校の環境にリンクしていて、セレブのトンプソン家が住む地区にある学校はかなり良いらしい。アジア系の学生が多い分、学力はトップクラスじゃないけど、決して低くはないし、しつけの良い子どもが多くて、穏やかな校風だから、安心して欲しいとトンプソン氏がしきりに言っていた。

本当は、学校に入るには、少なくとも母が一度はこちらに来て、面接をしなければならぬ。はじめのうちには、今回俺と一緒にこっちに来て、トンプソン家に挨拶をするついでに面接、という段取りになっていた。でも、トンプソン氏の口ぞえのおかげで、面接の代わりに電話で良いことになった。恐縮する母を、いいからいいからとトンプソン氏は再び押し切ったらしい。母はますます忙しくなってきたいだから、助かったけど、代わりに俺は一人で初登校しなければいけなくなった。ウィルは一緒だけど、母さんがいるのといないのでは全然違う。

「ヒロ、緊張してねえ？」

学校に向かうバスの中で、ウィルは何回もそう聞いた。週末の間に俺も愛称で呼ばれることになっていた。ウィルはすぐウィリアムからウィルになったけど、俺は「愛称で良いよ」というタイミングをはかれなくて、ずっと「ヒロマサ」のままだった。結局、自然なタイミングなんてつかめず、あらたまって言う事になって、ちょっと恥ずかしかった。

「まあ、大丈夫だと思う」

もちろん俺は緊張していた。でも、ウィルのほうがよほど落ち着かなさそうだった。朝出かける時なんか、そわそわと時計を見てはスクールバスまでまだあると言って、リビングを歩きまわっていた。ウィルは週末の間から、ずっと少し興奮気味だった。そんなウィルに「緊張している」と正直に言ったら、もっと張り切ってしまうそうだ。

「緊張してないけど、でも勉強は心配」

俺はすでに何度か繰り返した返事をした。

「そこは心配要らないって。俺が教えてやる！ 大体、ヒ口、頭いいからすぐ追いつくよ」

カナダに来る前、クラスを決めるために、一応学力試験があった。数学と理科は抜群にできて、国語に当たる英語や社会は散々、だった。英語が悲惨な結果になるのは予測できたけど、社会までダメなのは俺の自信を打ち砕いた。テーマに沿ってエッセイを書く練習なんてしたことない。でも、総合評価は高かった。俺がすんなり転入できることになったのは、トン普森氏の口添えも大きいけど、試験結果が良かったことも影響しているだろう。予想外の結果には、ウィルたちは少し舌を巻いたようだ。俺がここまでできるとは思っていなかったらしい。トン普森氏などは、これはウィルに教わったら逆に成績が下がりそうだな、と笑っていた。

数学と理科の不安はない。問題はそれ以外だ。英語はそこそこ話せるし、スケート関係でニュースや発表をたまに読むから、そこそこ読めもするけど、ライティングはさすがに母も俺にやらせてこなかった。英語も社会も授業時間が多いのに、ついていくのは楽しそうじゃなかった。

学校に着くと、俺はさっそくクラスに紹介された。白人が多い学校で、後は裕福な中国系の子供ばかり。日本人や日系人はほとんどいない。この学校の生徒にとっては、漫画やアニメや音楽なんかの文化は知っているけど、実際に触れたことがほとんどない国だ。そこからの新顔に、皆興味津々で、休み時間になったとたん、早口の自己紹介と一緒に、次々と質問をされた。

「なあ、日本って芸者が歩いてるってホント？」

一部ではあるけど君のは多分勘違いだ。ていうかなんでその年で芸者なんて知ってるんだ。

「忍者つて見たことある？」

ないよ。

「チョップスティック使える？」

当たり前だろ。

「寿司屋連れてって！」

トロントの店を俺が知ってるわけないだろ。

「日本人でも君みたいな顔の子、たくさんいるの？」

国籍上の日本人ならいるんじゃないか。少ないだろうけど。

後はもう突っ込みきれない。

日本にいた頃は、俺をちやほやする女の子に対して、男子はちょっとよそよそしかった。こっちでもアジア人と言うことでそうなるだろうと思っていたのに、いきなり取り囲まれて、俺はちょっとしたパニックになった。仲間はずれにされるよりはマシだけど、ここまで興味津々なもの困る。

「落ち着けよ、ヒロはこっち来たばかりなんだ。そんなに一度に聞かれて答えられるわけないだろ。もっと気遣ってやれよ。日本人はシャイなんだぞ」

他の子をかき分けてやってきたウイルが間に入ってくれたけど、はつきりいつて逆効果だった。今度は、日本人に興味がなさそうだったウイルの友人たちからも質問責めだ。

「朝も一緒に来てたけど、ウイルの友達？」

「もしかしてスケートやってるの？」

「いつ知り合ったの？ ウイルって日本行ったことあるの？」

とりあえず聞き取れたものだけ答えると、質問攻撃はもつと激しくなった。フィギュアスケート仲間で、ウイルの家にホームステイしているというのが、彼らの好奇心を大いに刺激した。大抵のこの年頃の男子にとって、フィギュアスケートはマイナー競技で、女の子っぽくて、クールじゃない。そのマイナー競技のために、極東の島国からはるばるやってくるといふシチュエーションは、アンビリーバブルなものらしい。

俺は、合宿の間に多少英語は上達したけど、早口の英語についていけるほどじゃない。いい加減へきえきし始めた頃、ようやくウイルが、俺の英語能力の低さを納得させて、質問攻撃をやめさせた。

助かったけど、その理由で助かるのはなんか屈辱的だ。

でも、屈辱とかなんとか言っている暇はなかった。案の定、英語の授業はついていける状態ではなく、補習が決まった。補習と言っても、俺は月曜から日曜までみっちりスケートの練習が入っている。居残りで勉強する時間があるわけはなかった。そこはリザの事前の説明もあって、学校側は理解してくれて、練習用のプリントを出され、先生に添削してもらうことになった。どうしてもわからないことはランチタイムに聞きに行く。

長い長い一日が終わって、ウィルと一緒に下校する頃にはもうぐったりだった。こんなに疲れたのは、合宿中、練習時間を伸ばしてまで、やり直しをさせられ続けた時以来だ。

「ヒロ、大丈夫？」

帰りのバス。朝と同じセリフで、ウィルは苦笑しながら俺の顔を覗き込んだ。朝とはうってかわって、ウィルは元気そうだ。俺って頼りになるでしょ、そうだよな？と顔に書いてある。確かに助かったけど、ウィルが火に油を注いだ部分もある。おかげで俺はぐったりだ。

「大丈夫じゃない……」

「まあ、皆、すぐ慣れるよ」

「そう願うよ」

実際、ウィルの言うとおりだった。

学校の同級生たちはすぐに俺の存在に慣れた。俺は勉強に慣れてきて、数学以外の科目も少しずつわかるようになっていった。

むしろ問題なのは、にわかには特別待遇でやってきた新人りに対する、リーズスケーティングクラブの生徒たちの反応だった。おまけにウィルの家にホームステイと言う事実はあるという間に広まったらしく、俺は遠巻きに敵意を向けられる存在になりつつあった。

なるべく友好的に接しようとしたけど、あまり上手く行くものじゃない。なお悪いことに、誰にでも礼儀正しく友好的に接した結果、

女の子たちの間で評判がやたらに上がってしまった。男子って言うのは基本的に、女子よりいい加減で、やることなすこと雑だ。俺は小さい頃から周りが女の子だらけで、それを敵に回してはやっていけなかったから、彼女たちに合わせるのに慣れていた。いつも笑顔で、乱暴なことはいらない。どうってことない話もきちんと聞いてあげる。その習慣を守っているうちに、俺はあつという間に女の子たちに大人気になった。

日本から来た、礼儀正しくて、優しく、可愛い男の子。理想的な友達だ。まったく付き合う対象とは見なされないのが悲しいけど、友達は結構できた。俺がからかわれると、日本の10倍くらい気が強い女の子たちが反撃してくれる。特に、ジニーという2歳上の女の子が、よく俺の味方をしてくれた。ゆるく波打つブルネットに、優しい茶色の瞳。人形のように可愛らしい見た目に反して、とにかく気が強い。リザの教え子の中でもトップクラスで、激戦の女子シングルの勝ち抜いているからか、嫌がらせに対するやりかえしっぷりは見ている俺が後ずさりするほどだった。そんな女の子に守られるのも情けないけど、おかげで嫌がらせは二度くらいでなくなった。そしてますます男子シングルの連中には嫌われる……悪循環である。

男に遠巻きにされるのは、日本の学校で慣れていたから、俺はさつさと諦めた。交流はほどほどにして、自分の練習に集中する。練習は厳しかったけど、楽しかった。リザは来年の3月にあるトリグラフトロフィーのノービス部門を目標にするつもりらしい。今年の大会の時にはもうエントリーできる年齢だったんだけど、コーチの方針で出場しなかった。だから、国際大会にはまだ出たことがない。遠くないうちに世界の舞台でこのプログラムを滑るのだと思うと、練習にも熱が入った。ウィルも同じ大会に出るから、ライバルということになる。実力も近いし、ウィルがちょっとリードすると俺が負けじと頑張つて、俺が褒められるとウィルが頑張るといふ繰り返しだった。2人で白熱している俺たちに、リザは嬉しそうだ。満足

そんな顔を見るたび、俺はジャスティン・ハリスが最初に言った、「ウィルのライバルを探してきたのかと思った」という言葉思い出した。

スタイルを見ると、ウィルは俺とまったくタイプが違うスケータ―だった。

ウィルの持ち味は高いジャンプとスピードで、嵐みたいに激しいプログラムを勢い良く滑るのが好きだった。見終わった後、聞く感覚も見る感覚も、丸ごと持っていていかれたような気分になる。それはそれでウィルに合っていると思ったけど、俺はどちらかというと、落ち着いた曲の音一つ一つにあわせて、丁寧に滑るのが好きだった。この小節は悲しみを表現して、次の小節は悲しみの中に投げかけられた一筋の光を表現する。そんな風に、振付には細かくこだわった。ウィルは「格好良ければいいだろ」という主義で、俺がいちいち細かく考えるのを見ると、イラツとするらしい。逆に俺は、ちよつとでも合っていない振付を見ると変えてやりたくなるので、ウィルを見ているとイラツとくることがあった。ウィルとスタイルが全然違うことは合宿の間から気づいていたし、それで議論になりかけたこともあったけど、いつも俺が話題をそらして終わっていた。でも、一緒に滑るようになって、だんだんその違いが気になるようになった。

そしてカナダにやってきて2ヶ月が経とうとするころ、俺はとうとうウィルと喧嘩になった。リザが知人のジャッジを呼んで、俺たち生徒の採点をしてもらった日のことだった。

「細かすぎなんだよ！ それよりもっとスピード上げろよ！ ジャンプ毎回毎回低空じゃんか！」

「高さか幅かどっちかあればいいってガイドラインにあるだろ！ 幅も流れもあるから良いんだよ！ ウィルこそつなぎ省くのやめろよ！ 振付つてのは全部意味があるんだよ！ だから全然PCSが伸びないんだ！」

「つなぎつなぎってヒロは細かいんだよ！ ジャンプがレベル低か

「つたら印象悪い！」

「PCSはちゃんと出てるじゃないか！ ウィルこそTESのわりにPCS低いつて言われてるの、いい加減どうにかしろよ！」

「あの程度のジャンプ構成で55も出してるヒロがおかしいんだ！」

「おかしくない！ ウィルこそあの程度のつなぎで55ももらってるくせに！」

最初のうちはお互いのプログラムに対して感想を言い合っているだけだった。2分10秒のところを直せとか、つなぎ減らしてジャンプのレベル上げるとか、そんな理性的な感想だったのだ。それが段々ヒートアップして、もう後はもうただの欠点の言い合いだった。俺たちの怒鳴り声は下まで届いたようで、ただならぬ声を聞いたエドワードが駆け込んだ。後ろからトンプソン氏もやってくる。「2人ともどうしたんだ」

トンプソン氏の顔を見たたん、俺は怒りがすーっと引いていくのを感じた。俺がここに置いてもらえるのは、ウィルがそう望んだからだ。まだ2ヶ月にもなっていないのに、ウィルと喧嘩するなんて。いつもみたいに、適当に話題を変えれば済むことだったのに。どつと後悔が押し寄せてきた。

「ヒロが、俺のTRが簡単なくせに点が高いつて。俺のTRをもつとややこしくしろつて言うんだ。ヒロこそルツツ跳ばないのに55も出してるくせに！」

ウィルはふくれつつらで訴えた。俺にはできない。自分の父親だからこんな無邪気に、自分の言い分をぶつけられる。自分に味方してくれる、どんなにみつともないワガママを言っても、見捨てたり嫌われたりしない。母以外で、そんなふうに信じられる人は、俺にはいない。

エドワードとトンプソン氏は数度目を瞬かせた後、顔を見合わせ、同時に嘔き出した。

「いや、喧嘩の邪魔をして悪かった」

笑いすぎて痛むお腹を押さえながら、トンプソン氏は言った。

「好きに続きをしてくれ。ただし、あんまり煩くするなよ」

そういって、二人はさっさと俺たちに背を向けた。ばたんと扉が閉じられる。俺とウイルは顔を見合わせた。ウイルは何がなんだかわからないという顔をしている。俺もそうだろう。

「……あー、その、ごめん。俺はただ、振付って、元々振付師がバランス考えてつくってる、省いたらバランス悪くなって、評価がぐっと下がるって言いたかったんだ。ウイルは元々良いプログラムだし……」

俺に謝られて、ウイルはしゅんとなった。自分のほうがちょっとお兄さんのつもりだったことを思い出したようだ。

「うん。俺こそごめん。ヒロはジャンプ跳べるんだから、プログラムに入れたほうが、皆に実力を見せ付けてやれると思ってた」

「うん。……ジャンプ難しくすると、振付変えなきゃいけないから、それはちょっと嫌なんだ。でもありがとう」

「俺も、勝手に省くなっかっていつつもりザに言われるんだけど、全部振付通りにやったら、絶対ジャンプ失敗するから……ありがとう。」

またさ、なんか思いついたら言ってくれよ。ヒロのいうこと、正しいと思うし……」

俺はうなずいた。

「ウイルも、思うことあったら、教えて」

ウイルがこっくり首を縦に振って、手を差し出した。仲直りの握手だ。

その後は、なんとなく、今現役の選手で好きなプログラムの話になった。俺の予想通り、ウイルはロシアのゼレノフだった。今度のオリンピック、優勝ナンバーワン候補だ。ウイルが挙げたのは、一昨年、ヨーロッパ選手権で、歴代最高点を叩き出したショートプログラムだった。ヨハン・シュトラウス「雷鳴と稲妻」。ゼレノフといえは力強い演技というイメージだけど、そのイメージの根元にあるのはこのプログラムだろう。俺は、去年のフリーの「シエヘラザード」みたいな、傲慢さと優雅さを併せ持ったもののほうが好きだ。

ヒロは、と聞かれて、俺は、ちよつと考えた後に、ヨハン・ハネルと言った。スウエーデンの人だ。

「ハネルはなあ……すごいんだけどさ」

ウィルのこの言い方がすべてを表している。素晴らしいスケーターなのは間違いない。場合によってはゼレノフさえ凌ぐだろう。年に一回きりのパーフェクト演技を、見せるべき場所で見せられるなら。

「シヨパンの『ノクターン』が好きなんだ。最近はずよつと傾向変えてるみたいだけどさ、透明感があつて、スケーティングにも合ってるし。ああいうの、また見たいな」

「あー、わかる。前もリヒャルトマンの『ロミオとジュリエット』とか言つてたもんな……あれ、でもジェイは言つてないよな、ヒロ」
思い出したように、ウィルが首をかしげた。

「ジェイ　ジャスティン・ハリスつてドンピシャじゃないか？」
俺はちよつとドキツとした。カナダに来てから、ジャスティン・ハリスについて聞かれるのは二度目だ。

嫌いじゃない。むしろ好きだ。でも見ていると、なんだかもやもやと胸がざわつくというか、何かが違う、という気持ちになる。良いプログラムなのに、何か変だ、つて。だから、偉大なスケーターなのに、いつも落ち着いて見られない人だ。

「嫌いじゃないんだけどね。見ているとなんかもやもやするんだ」
「もやもや？」

「うん。どのプロ見ても、なんか、いつつも、俺ならこここうするのに、ああするのに、つて思う。なんか、色んなところがちよつとずつずれてる気がするんだ。それが気になって、いつつも集中できない」

リザには言わなかったことだ。あの時はまだ英語でこんな複雑なことは説明できなかったし、子供の俺が、それを彼女に言うのは、失礼な気がした。ジャスティンは、リザが最初に育てた金メダリストで、自他共に認める彼女の一番弟子だ。リザがコーチとしての名

声を築いたのも、彼の活躍があつたからだつた。

「ふーん……」

ウィルはうなずきながら、なんだか変な顔をしていた。

「愛称で呼んでたけど、会つたことあるんだ？ まああるよね」

ウィルがスケートを習い始めた頃、ジャスティンはもう引退していたけど、ウィルは年の離れた弟弟子ということになるし、トンプソン氏と付き合いもあるだろう。彼もスケート協会で仕事をしているはずだ。

「うん。最近あんまり会わないけど、小さい頃はよく遊んでもらつた」

「へえ。どんな人だつた？ 合宿でちょっと話した時は優しそつただけ」

「うん。頭良いし、優しいし、面白いし、すげえ良い人。俺、嫌なことあると、よくジェイのところの子になる、ってワガママ言つてた。ジェイが離婚した後一回うっかり言っちゃつて、父さんにはめちやくちや怒られたんだけど、ジェイはそれでも笑つて『僕のところに来たらママはいないけど良いの？』って」

ちよつと離れたところを見ながら、懐かしむように、ウィルは言つた。ジャスティンに離婚歴があることは知つているけど、俺が彼を知つた頃にはもう独身つてイメージだつたから、かなり前のことなんだろう。

「優しい人なんだね」

「やっぱ羨ましいな、と俺は少しだけ思つた。」

一度喧嘩してからは、俺とウィルはお互い遠慮なくプログラムについて話し合うようになった。2人で意見を戦わせるのは、楽しいことだつた。それまで、俺はコーチや振付師以外と、スケートの話なんてしたことがなかった。母さんはスケートには詳しいけど、細かい振付を相談できるほどじゃない。似たような年の奴と、好き勝手に好みをぶつけあうことがこんなに楽しいなんて、知りようもな

かったのだ。

それは、ウイルも同じだった。一緒に過ごすうちに、俺は、ウイルがスケートを習っている友達を欲しがっていたことに気づいた。学校は、セレブの子どもいたりするから、父親がデヴィッド・トンブソンでも、友達を作るのに困ったりしない。でも、学校の友達は皆、スケートには大して興味がない。ウイルのお兄さん二人は、スケート以外の道に進んだ。リンクで仲間を作るには、彼の父親の名前は、あまりに影響力が強すぎた。そのことを知ってもほとんど態度を変えず、気も合った俺は、まさにウイルが必要としていた存在なんだろう。ウイルの家族もそれをわかっていたのと思う。ウイルは、トンブソン家のアイドルだった。年の離れた末っ子で、ご両親も、お兄さんたちも、いつも彼のことを気にしている。だから、外国人の友だちを突然ホームステイさせる、なんてとんでもない我俥を受け入れたのだ。

9 (後書き)

点数や専門用語のところは適当に読み流してください。

以下一応解説

TES II 技術点 (個々の技の難度と出来ばえ評価の合計)

PCS II 演技構成点 (プログラム全体の評価・5項目・10点満点)

つなぎは演技構成点5項目の一つで、技と技の間、ただ滑っているだけじゃなく、色々難しいことをやると評価が上がります。当然振付を勝手に省けば下がります。つなぎを取ることを目指して振り付けてますから。

演技構成点はジュニアとしての「合格点」が5と言われています。

ヒロの目には、勝手に振付を省いたウイルのつなぎは「合格点」に到達していないように見えただけでしょう。

演技構成点は、ジュニア世界選手権のトップで平均6後半〜7ギリギリくらい。選手のタイプによりますが優勝しても平均7ないことも。

ウイルが言ってるヒロの「55」はフリーのことなのですが(シヨートは係数が違うので30点〜40点くらいが普通)、フリーで55あると平均5半ば〜5後半、ジュニア世界選手権でトップ10に入ってるので、13歳としてはかなり高い方です。

また、「ルッツ飛ばないのに55も出している」というウイルの発言は、演技構成点も技術的難易度がある程度勘案することを踏まえてのもので。ジュニア男子で上位を狙うなら最低限トリプル5種は欲しくて、この5種が正確に跳べると評価が変わってきます。跳べないのに55なのは、プログラムのバランスと本人の表現力が優れている証拠です。そして跳べるならもっと上がりますし、ジュニ

ア適齡期（14歳）になればメダリストクラスの点が取れることが期待できます。それらを踏まえてウィルは「高い！」と文句を付けているのです。

カナダに来てから最初の2ヶ月は、あっという間に過ぎた。冬が深まっていくに連れて、街中はイルミネーションが増えて、夕方になるとキラキラ光ってロマンチックだった。でも、それを楽しむ余裕はあまりなくて、初めて過ごすカナダの冬に、俺は毎日震え上がっていた。気温はずっと一ケタ台で、0度を下回る日も珍しくない。寒い。とにかく寒い。それなのに、氷の上で毎日練習しなければいけない。もこもこに着こんで滑ろうとする俺を笑い、そんなんじや滑れないって、とウィルは防寒具を奪い取っていった。なんて友達なんだ。

すぐ慣れるよ、とウィルは言ったけど、その「すぐ」はなかなかやって来なかった。リザはちよつと同情してくれたものの、練習はいつもどおりだった。唯一の救いは、ここは設備が整っているから、体力づくりのランニングを外でしなくても良い、ということだった。でもそんなの当たり前だ。日本にいた時みたいに、冬も外で走っていたら、途中で氷漬けになるんじゃないだろうか。

12月に入っても、ありえない寒さと戦いはちつとも楽にならなかったけど、ある日、俺は思いがけず、早めのクリスマスプレゼントを受け取った。その日はリンクの貸切が夜からで、俺とウィルはいつもみたいにリンクに直行せず、一旦家に帰った。まだ、午後早い時間。いつもじゃありえない時間の帰宅だ。リビングに入るなり、俺はびっくりして立ち止まり、ウィルは叫んだ。

「ジエイ、久しぶり！」

「こら、走るな。怪我するだろ」

抱きついてきたウィルを抱きとめて、ジャスティンはさわやかに笑った。

「久しぶりなんだもん。ジエイ全然遊びに来てくれなかったじゃん」
「今日も仕事だよ。ナシヨナルの打ち合わせ」

「えーっ」

「がっかり顔のウィルを引き剥がして、彼はまだ戸口にいる俺に気づいた。」

「久しぶり、ヒロマサ。夏以来だね」

「思いがけず名前を言われて、俺はちよつと嬉しくなった。あの時、たまたまりザの傍にいただけなのに、名前を覚えているなんて。」

「お久しぶりです」

慌てて、差し出された手を握った。人に会うと、お辞儀する癖はようやくなくなってきた。なかなかこの癖は治らなくて、何度も恥ずかしい思いをした。

「ウィルの友達だったんだ。またりザのところに来たの？ 学校は冬休み？」

俺はこつちに住んでいるわけじゃなく、あの時はただの合宿で、日本から来ていたということもちゃんと覚えていたらしい。すごく頭のいい人なんだな、と思った。俺は、母がぼろつとこぼしたことを思い出した。ジャスティン・ハリスって、トロント大出身なの、カナダの名門よ。カナダの名門が世界でどれくらいなのかは知らないけど、母がそう言うくらいだから、すごい大学なのだろう。

俺が母のセリフを実感しているうちに、ウィルが勝手に先回りして、俺がここにいる理由を説明した。

「りザがヒロを気に入って、こつちに呼び寄せたんだ。で、お母さんが仕事でまだ来れないから、しばらくウチにホームステイしてるわけ」

ウィルの説明は、色々省いているせいでとてもわかりにくかったけど、ハリスさんは、俺の家庭に事情があることを察したらしく、軽く頷いただけで、それ以上は聞かなかった。

「一人で大変だね。でも、りザは素晴らしいコーチだから、きつと来たかいがあると思えるよ。」

「ありがとうございます。またお会いできて嬉しいです」

「ちよつと変な答え方だった。でも、ハリスさんは気にせずに、に

こつと笑った。

「僕も嬉しいよ。頑張ってたね」

頬が少し熱くなるのがわかった。赤くなってる、と横からウィルが俺をつつく。うるさい。ウィルだって、アイドルのイヴァン・グラソフスキーに会ったら絶対あがりまくるだろ。

「はい。ありがとうございます」

「じゃあ、僕はそろそろ帰るよ。2人とも、今度はリリースで会おう」「もう帰るの?」

ウィルは残念そうだ。

「ウィル、ジエイを引き止めてはダメだよ。聞き分けなさい」

奥からトンプソン氏が出てきて、ウィルに釘を刺した。ごめんね、とジャステインはウィルの頭を撫でた。

「わかったよ……」

ちよつと膨れながらも、ウィルはしぶしぶうなずいた。

「良い子だ。それに、この後はちよつとしたサプライズもあるしな」「サプライズ?」

急に目を輝かせて、ウィルが父親にとびつく。俺はその間に、ジャステインに話しかけた。

「リリースに来てくださるんですか?」

「うん。時々見に来てって、リザに言われてたんだけど、ここ数ヶ月は忙しくてね。うちからリリースはちよつと不便なんだ。でも、君がカナダに来てると知ったからには、絶対に行かないと」

「……楽しみにしてます」

彼はくすつと笑った。多分、俺の頬はまた赤くなっているに違いない。

「君のスケーティング、本当にとても綺麗だったよ。スピンも、ジャンプもね。今度はプログラムを滑っているところが見たいな」

「今、練習しているところです」

「曲は?」

「ショートはエルガーの『愛の挨拶』、フリーは『o v e r t h

e r a i n b o w』です」

「そう。エルガーは僕も滑ったことあるよ。ジュニアの頃だけど」
知っている。どこのテレビ局も放送してない、貴重な映像なのよ、
と言って、コーチが特別に見せてくれた。

「楽しみにしているよ」

じゃあデヴィッド、僕帰るね、とジャスティンは手を振った。俺
の後ろから、ああ、気をつけて、とトンプソン氏が慣れたように返
す。俺は、褒められたことを頭の中で繰り返すのに夢中で、つら
れてトンプソン氏のほうを見ることはしなかった。

スケーティング、とても綺麗だったよ。君が来ると知った
からには、絶対に行かないと。

褒められた言葉がぐるぐると頭の中を回っていて、何度も何度も
確かめてしまった。おかげで、俺にも手を振ってくれたのに、危う
く無視してしまうところだった。

10 (後書き)

しばらく短めが続くと思います。
話のリズムがこれくらいで切れるので。

「ねー、サプライズって何さ」

ジャスティンが帰った後も、ウィルは父親にまわりついていて。「サプライズはサプライズだ。先に言ったらサプライズじゃなくなるだろう。ヒロマサも、楽しみにしていなさい。すぐ来るよ」

息子をあしらいながら、トンブソン氏は俺にウインクをした。ウィルだけではなくて、俺にとっても楽しいサプライズらしい。なんだろう。次はジャクソン・プライスとか？ でも彼って、今はアイスショーツアーの真っ最中だったはずだ。昨日そのニュースを見た気がする。

トンブソン氏の言うとおり、呼び鈴が鳴ったのはすぐだった。迎えに行つてあげなさいといわれて、俺とウィルは玄関に出た。暖かい家の中と違って、凍りつくように冷たい風が、ひゅうつと吹き込む。でも、俺は首をすくめるのも忘れて、目の前にいる人を見上げた。門前にいたのは、細身の女性だった。きつちりと結い上げられた髪は、つやつやの焦げ茶色。派手じゃないけど、一部の隙もなく仕上げられた化粧。お気に入りの、薄いグレーのコート。そして、微笑んで俺を見つめる、髪と同じ濃茶の瞳。

「母さん！」

今度は俺がウィルを放り出して、来客に駆け寄り寄る番だった。

「きゃあ、ダメよ、これ割れ物なんだから！」

飛びついてきた俺に悲鳴を上げて、母さんは抱えていた紙袋を庇った。でも、その声は笑っている。

「ヒロ、まずは中に入れてもらえよ。寒いんだから」

仕方のない奴、と言いながら、ウィルは母の後ろで扉を閉めた。

ほっぺたが切れそうなくらい冷たい風が、ぴたつと止まる。

「元気そうね」

紙袋をそつと置いて、母は玄関先に立ったまま、ぎゅつと俺を抱

きしめた。ふんわりと、爽やかな花の匂いが漂う。母さんがいつも使っているシャンプールの香りだ。俺は急に泣き出したような気持ちになった。

「はじめまして、ウィリアム。ヒロマサ、の面倒を見てくれてありがとう」

「いえ、そんな……」

にっこり微笑まれて、ウィルはちょっと赤くなっていた。そりゃそうだ。こんな温かくて気の強くなさそうな女の人なんて、こっちは少ない。

「母さん、なんで来るって教えてくれなかったの？」

教えてくれれば空港まで迎えに行った。久しぶりに会うのに、教えてもくれないなんて、ちょっと冷たくないだろうか。

「出張でニューヨークに来たから、休暇をもらってこっちに足を延ばしたの。仕事がいっ終わるかもわからなかったから、あなたの学校が終わる時間に合わせて来れるかどうかわからなかったのよ。結局会えなかったりしたら、期待した分がっかりするでしょう？」

「え、じゃあ、俺に会いに来たわけじゃないの？」

「今日はトンプソン家にお礼にね。スケート・カナダとスケート・アメリカにまで連れて行ってもらったのに、お礼をしないわけにはいかないでしょう」

俺はハツとした。

北米のグランプリシリーズ、今年はケベックとデトロイトだった。どっちもトロントから近いし、ウィルが最初からうるさく言っていたから、行くのが当たり前のようなつもりになっていたけど、旅行まで手配してもらったのだ。母さんが気を使うのも当たり前だった。トンプソン家の好意に甘えることに、俺はいつのまにか慣れすぎてきたみたいだ。

「ありがとう」

「気にしないで。ウィル、ヒロマサはこっちでお邪魔になってない？」

「いえ、全然」

ウィルはぶんぶんと首を振った。

「むしろ最近、俺が数学を教えてもらってるくらいで……」

「そう。お役に立てて良かったわ」

俺たちがリビングに入ると、トンプソン氏はにやりと笑った。

「良いサプライズだっただろう？」

「もちろんだよ、父さん！」

マザコン気味な俺を見て、どんな人なのか見てみたい、とウィルはしよっちゅう言っていた。ウィルも喜んでくれて、良かった。

「はじめまして、ミスター・トンプソン。お会いできて光栄ですわ」

「こちらこそ」

よそゆきの笑顔で、母はトンプソン氏と握手した。仕事をする時の顔だ。思ったより落ち着いて話せそうだ。俺は二人から目を離して、そわそわとお土産を見ているウィルを軽くつついた。

「期待しないほうがいい。割れ物って言ったら、多分酒だ」

焼き物や細工物のような、もらっても扱いに困るものを、母さんが手土産にするわけがない。それ以外で割れ物といったら、酒しかない。

「これ、先日にフランスに出張に行った際のものなんですけど」

予想通り、出てきたのは高そうなシャンパンだった。妥当なプレゼントだ。ウィルはがっかりしていたけど、母はすかさず別の箱を取り出した。

「ウィルにはこれを」

新作のゲームソフト。もちろんウィルが持っていないタイトルだ。そういえば、三日ごとのスカイプチャットで、どんなゲームをしているのか母が聞いてきたことがある。実に抜かりがない。ウィルはガッツポーズをしかねないような勢いで受け取った。ねだつてもクリスマスに貰えるか微妙なセンだったのに、思いがけないところで転がり込んできたプレゼントだ。

母さんってこういうの上手かったんだ、と俺は意外な母の特技を

見つけた気がした。トンプソン家の人たちは、プレゼントなんてもらい慣れていそうだし、大抵の欲しいものは手に入る。そういう人たちに喜ばれるプレゼントをぴったり選んでくるなんて、すごく難しいことだ。一緒に暮らして2ヶ月になる俺でも、12月に入ってからプレゼントを考え始めているけど、悩むばかりでまだ何も思いついていない。

しばらく皆で歓談した後、後は久しぶりに親子2人で、ということとで、俺と母はリビングに残された。

「そういえば、母さん、さっきジャスティン・ハリスが来てたんだ。もうちょっと早く来たら良かったのに」

「ミスター・トンプソンからメールを貰ったから、知ってるわ。だから時間をずらしたのよ。お客が来ている時にもう一人客が来たら大変でしょう」

「でももつたいないことしたよ。母さんだって、ファンだったんだろ？」

ジャスティンが現役だったのは、ちょうど母が高校生か大学に入ったくらいの頃だ。母はあまり教えてくれないけど、その頃にはもうスケートファンだったのは間違いない。母さんは、ちょっとだけ困ったように笑った。

「あの頃、彼のファンじゃなかった女の子なんていないわ」

つまりはファンだったということだろうに、変にもつたいぶつた言い方だった。昔、誰かのファンだったと知られることが、恥ずかしいんだらうか。確かに、会場で熱心にバナー振り回している姿とか、想像しにくいけど。

「カナダに越してくれば、また機会があるわよ」

「そりゃそうだけどさ……」

やっぱり、もつたいない、と思った。彼と話すところ、見てみたかったのに。俺がそう思っているのも知らず、母は穏やかに微笑んだ。

「あなたが会えたならそれで十分よ」

「そう?」

「ええ。ミスター・ハリスとお話できた?」

「うん」

聞かれて、さっきの舞い上がった気持ちもまたよみがえってきた。「夏にね、ちよつとだけ会ったんだのは話したでしょ。その時、俺のことちゃんと見てたみたいで、スケーティングと、スピント、後ジャンプも綺麗だって。今度はプログラムを滑っているところが見たいから、そのうちリーズに来るって!」

嬉しかったことだけまず言おうとしたら、ところどころ、俺に都合よく話を変えていた。でも訂正する前に、まあ、と母は手を合わせた。

「良かったわね。そこまで言ってもらえるなんて」

「うん、すごい嬉しかった。半分はリップサービスだと思うけど」

「そんなことないと思うわ。きつと、あなたのスケートに、彼の目に止まるものがあつたのよ」

「そうかなあ……」

言いながら、俺は母の言葉そんな気がしてきた。ことスケートに関して、母の言うことは大抵親の鼻息が入ってるから、ちよつと差し引いて考えるようにしてきたけど、この時は不思議と、母さんが言うならそうなのかもしれない、と思った。

母の来訪はあっという間だった。ぜひ食事も、と言われたのに、飛行機の間があるから、と急いで帰ってしまった。次に会えるのは来年の春だ。

その週末、グランプリファイナルがあった。男子はゼレノフが優勝。スケート・カナダ、ロシア杯と、確実に調子を上げてきている。シヨートもフリーも、彼に似合った良いプログラムだ。安直だとも批判されているけど、冒険して失敗するよりはずっと良い。カナダのブラウンはファイナルに残れなくて、北米勢は2位と4位のアメリカ選手だけだった。

俺が期待していたハネルは残念なことに最下位だった。プログラムはとても良かった。去年までのすごく力強いプログラムから路線変更して、また昔の柔らかい雰囲気を取り込んだ、緩急のある振付だ。曲にもとても合っているし、シヨートもフリーも名曲を選んできている。シヨートは一昨年アカデミー音楽賞を取った映画のサントラ、フリーはワグナーの「ニーベルングの指輪」でバランスも良い。でも、合わせて2転倒4ミスではどんなにプログラムが良くても点は出ない。それでも、いつも丁寧な、心を込めて滑る彼の気迫は、テレビ越しにも伝わったから、なおさら結果が残念だった。

グランプリファイナルが終わって、解説の仕事から解放されたトンプソン氏は、帰ってくるなり「ツリーを飾るぞ」と宣言した。それを聞いて、「今年は早いじゃん、やった！」とウイルがガッツポーズをしたけど、俺はいまいち何のことかよくわかっていなかった。クリスマスツリーだということはもちろんわかってるけど、日本にいた頃はデパートのを見るくらいだったし、だいたいこの時期は全日本選手権の準備で慌しくて、あまりクリスマスを意識することもなかった。25日の朝、テーブルにプレゼントの箱があるのを見て、はじめてクリスマスだと気づいた年もあったくらいだ。

トンプソン家のクリスマスへの気合の入れようは、そんな日本人の適当な過ごし方とは比べ物にならなかった。練習から帰って来て、俺はリビングに立てられた巨大なモミの木を、呆然と見上げた。幹はざらざらしていて、濃い緑の尖った葉が、綺麗な三角形を作って生えている。本物だ。本物のモミの木だ。それが、広いリビングの三分の一くらいを占領している。はじめてトンプソン家に来たとき、リビングの大きさにびっくりして、さすがセレブだと思ったけど、その大きなリビングも今はかなり狭く見える。

「さーて、やるか」

リチャードとエドワードが、脚立と大きな箱を運んできて、箱からごそごと長い紐みたいなものを取り出した。細い電線に、丸い電球がたくさんくっついていて。イルミネーションライトだ。

「上の方は俺たちがやるから、下を巻いてくれないか？」

「はい」

ツリーを飾るのなんて、小説の中で読んだことがあるだけだ。箱いっぱいボールや人形を見て、俺はわくわくし始めた。

「俺も上やりたい」

「落つこちてナショナル出れなくなっても良いんならな」

不満そうなウィルを、エドワードが軽くあしらった。

「落ちないよ。兄弟の中じゃ俺が一番バランス感覚良いもん」

それは正しいと言えなくもない。フィギュアスケート選手はバランス感覚が悪かったらやっていけない。特にスピンなんか、回る前にコケてしまう。

「オチビさんが何言ってるんだか」

笑いながら、二人は脚立を登って、電飾を巻きつけ始めた。確かに、見ているだけでもちよつと怖そうだ。俺は大人しく下で見ている。巻き終わったら、残りはぶら下げる飾りだけだ。今度は脚立に登ってもいいとお許しが出た。両手を脚立から離さなくてもつけられるからだ。ウィルは楽しそうに登ったけど、俺はやっぱり下で見るだけにした。上も下も飾りをつけることに変わりはない。赤や緑

や金のボール、ベル、スノーフレーク、天使の人形。人形以外はどれも質のいいプラスチックで、キラキラ光って綺麗だ。偏らないように、あちこちに散りばめていく。トンプソン氏と夫人は総監督で、少し離れたソファに座って、どこに何を飾るのか、俺たちがいちいち指示した。小一時間もすると、箱いっぱい飾りも無くなつて、ただのモミの木は賑やかなツリーになった。

「よし、最後だな」

箱が空になったのを確かめたりリチャードは、ベロア地の布袋を取り上げた。箱の一番上に乗っていた袋で、ずっと横に除けてあったのだ。なんだろうと思ってみると、黄色いクリスタルでできた星が出てきた。ツリーのとっぺんに付けるものだ。リチャードは中身を確認めると、また袋に戻して、側で見ている俺に袋ごと手渡した。

「ヒロが飾れよ」

「え？」

無造作に手渡されて、俺は戸惑った。

「クリスマス、初めてなんだろう？ 記念に飾ってみなさい」

トンプソン氏もそう言ってくれたけど、とっぺんの星を飾るのは結構特別なことのはずだ。俺はキリスト教徒じゃないし、良いんだろっか。

「でも」

困ってウィルを見ると、ウィルはニカッと笑った。

「良いんだよ。ヒロが一番小さいんだから、ヒロが飾れば良い」

小さいとは言っても、ウィルとの歳の差は2ヶ月だ。

「ウィルは毎年飾ってるからな」

普段俺に話しかけてこないエドワードまでそう言ったので、俺は袋を持って、恐る恐る脚立を上がった。一番上についたら、星を出して、ツリーのとっぺんに差し込む。ぐらつかないことを確かめて、手を離れたら、下で三人が拍手をした。ツリーの完成だ。

「電源入れるぞ、ヒロ、離れるよ」

リチャードがそう言っただけでスイッチを入れると、電飾がすぐに光りだした。交互に光るタイプじゃなくて、全部一斉に、白い光を放っている。てっぺんの星も、まわりの光を反射して、キラキラと輝いた。

「完璧！」

ウイルが叫んで、もう一度拍手した。俺は慎重に脚立を降りてから、一緒に拍手をした。静かに光り続けるツリーと、キラキラ輝く飾り。とても綺麗だった。これを、皆で一緒に飾ったのだ。一緒になつてツリーを見上げながら、母さんに見せたいな、と思った。母がカナダに来るまで、後4ヶ月もある。この前母さんに会うまでが3ヶ月弱。それよりも長い時間が、まだ残っていた。

その冬、俺は初めて、全日本選手権を見ないで過ごした。去年までは一年で一番大きいイベントと言っても過言じゃなかったけど、見ないで過ごすと思えば案外どうってことはなかった。結果だけオンラインリザルトでチェックした。中沢さんは調子が悪かったらしく、14位だった。今年の全日本ジュニアで良い成績を取れば、俺も出場できたかもしれない。でも、俺は去年優勝した全日本ノービスすら出場しなかった。もともと、俺はあまり本番に強い方ではない。カナダに来て二月も経っていない時期で、新しいことに挑戦しているせいで技術も不安定だし、日本に行つて戻るのはやめたほうが良いとリザが判断したのだ。

俺は、余計なことを考えるのはやめて、練習に集中することにした。年が明ければすぐカナダの国内選手権だ。その後にアメリカの国内選手権があつて、ユーロ、四大陸、オリンピック、ジュニアワールド、そしてワールド。その後はいよいよトリグラフトロフィー。トリグラフと同時に春を迎える頃、母がようやくカナダへやってくる。

13 (前書き)

冒頭で出てくるイーグルからのダブルアクセル(2A)は

<http://www.youtube.com/watch?v>

[UJYWmofNNg0:38、](http://www.youtube.com/watch?v=UJYWmofNNg0:38)

<http://www.youtube.com/watch?v>

[XLTW8A79EKQの1:03あたりからジャンプまでを見](http://www.youtube.com/watch?v=XLTW8A79EKQ1:03)
[てください。上はトリプルアクセル\(3A\)ですが。](http://www.youtube.com/watch?v=3A)

画質は下のほうがはるかに綺麗ですがどんな技か知るには上のほうがわかりやすいと思います。

クリスマスが終わってしばらくした日、リーズスケイティングクラブに来客があった。俺はイーグルからのダブルアクセルに必死になっていて、気づきもしなかったけど、ウイルのでかい声でさすがにわかった。ジャスティン・ハリスだ。本当に来たんだ。これから試合続きで、彼も解説やコメンテーターの仕事が忙しいはずなのに「こんにちは。約束どおり来たよ。夏よりも上達したみたいだね」ウイルに呼ばれて寄ってきた俺に、彼はいつもどおりの笑みを見せた。

「こんにちは、ミスター・ハリス」

「ジエイでいいよ」

俺はこっくりうなずいた。本当は、俺も、ウイルのように気がねなく彼の名前を呼びたかった。そうするようになったからといって、ウイルみたいに親しくしてもらえるわけではないけど、それでも羨ましかった。

「プログラム、見せてもらえる？」

これから1時間は俺が自由に使える時間だ。もしかしたら、あらかじめリザにそのことを聞いてきたのかもしれない。

「はい。えっと、シヨートですか？ フリー？」

フリーだったら心の準備ができてないからちよつと辛い。4分は長い。でも、この人が見たいと思う方を見て欲しかった。

「シヨートかな。君のエルガーを見てみたい」

笑顔は優しいけど、なんともプレッシャーのかかる言葉だ。

ジャンプを軽く確かめて、リンクの真ん中に立った。曲が始まる。軽やかで甘いメロディ。前のコーチが選んだ曲だ。ここからは俺の世界だ。女の子にプロポーズする曲と言われて、はじめ、どう表現すればいいのか全くわからなかった。それを聞いたリザに、「挨拶」だから自分を紹介するつもりで滑ってみなさいと言われてから、ず

つとそうしている。それならできる。旋律に乗せて、自分を見せる。ありったけの想いをこめて、どこまでも羽ばたけるかのよう。

ランスルーは、さっきやってたイーグルから跳ぶ2Aで転倒しかけたの以外は、まずまずだった。キャメルからドーナッツになって、アップライトに繋げるスピも、なんとか行けた。8回転には足りなかったけど、一応回りきれて良かった。トリプルコンビネーションはちゃんと飛べたし、フリップがとても上手く行ったのが嬉しかった。一応合格点だろう。

肩で息をしながらリンクサイドに戻ると、いつの間にか来ていたリザと一緒に、ジャスティンが拍手をしてくれた。ウィルはちょっと不満顔だ。2Aで手を付いたせいだろう。

「良かったよ。リザは、本当に素晴らしい原石を見つけてきたんだね」

「ジェイ、育ちかけの子供をあまり凶に乗せてないで」

褒められて、俺だけでなくリザもちょっと照れたようだった。じゃあ、しばらくヒロを頼んだわよ、と言って、誤魔化すみたいに、サボってないで練習しなさい、とウィルを連れて行ってしまふ。

「音の中にとってもっと上手に見えるね。びっくりしたよ」

「ありがとうございます」

恥ずかしくなって、俺ははにかむように答えた。大抵の大人はまず俺のスケートイングを褒める。そして、演技を見ると、練習よりもずっとよく見えると言って音楽との調和を、驚きながら賞賛してくれる。「表現力」は照れるけど、慣れた褒め言葉でもあった。でも、若い頃から表現に定評があったジャスティンに言われるのはまた違ふ。

「国際大会には出たことある？」

「まだです。来年のトリグラフに出るつもりですけど」

「ノービス？」

「はい」

「なら、フリーも同じくらいジャンプが跳べれば、優勝できるね。」

ウィルがいたらちよつと微妙かもしれないけど」

そういつて、ジェイは離れたところに行つたウィルを見た。

「でも、今の採点傾向ならヒロマサだと思つな。PCS、君のほうが出るだろうし」

「本当ですか？」

「うん。あ、でもね、最後の2Aの入りは変えたほうが良いと思うよ。イーグルからつて難しいし、独創性がないつてことであんまりGOE出ないから、他のつなぎでも良いと思う」

「どんな風にですか？」

「やつてみせたほうがわかりやすいかな」

そういつて、彼はすつと滑つていつた。彼のスケートを生で見ると初めてだつた。今でも時々ショーに出ているけど、北米以外はほとんど出ない。俺が本格的にスケートを始めて、アイスショーによく行くようになった頃には、彼はあまり日本で滑らなくなつていつた。

一蹴りでリンクの真ん中へ。速いのになめらかで、まるで重みを感じさせないスケーティングだ。細い軌跡を残して滑つていく、ぴんと背筋の伸びた後ろ姿を見て、俺はふと、最初に見たアイスショーのことを思い出した。まだ2歳だつたけど、今でも、そのワンシーンが記憶に残つていつる。あの人も背筋が伸びていつて、生きた彫刻みたいな、綺麗なポジションを取つていつた。ただ滑つていつるだけでも、小さな姿勢の違いで、見栄えが全然違つてくる。その見本みたいな滑りだつた。覚えていつるのはそれだけだ。どんな顔をしていつたかは、二度と思いつせなかつた。ただ、ジャスティンを見ていつて、突然思いつ出した。まつたく根拠はないけど、もしかしたらこの人だつたのかもしれない。

彼がやつて見せた振付は、腰を落として滑るもので、技術は簡単だけど、独創的だつた。そんなに変わつたことでもないのに、視線が吸いつけられるようだつた。

「納得いつかない顔だね」

戻ってきたジャスティンは、俺を見てちよつと笑った。

反論してご覧よ、という顔だ。この人は時々、ちよつと偉そうなところがある。実際偉いんだけど。

「やりやすくて、GOEが出そうなの、ってことですよね」

俺が言つと、彼は少し眉をあげた。

「うん、そう。よくわかったね」

「でも、フリップ トウループを降りた後、低い姿勢になって、またアクセルじゃ、いかにも『GOE狙いでつなぎ入れました』って感じになりませんか？」

もちろんそれでもGOEは出るけど、全体のバランスが重視されるPCSは伸びない。元のイーグルはちゃんと曲に合わせた見せ場だった。

「なるほど」

ちよつと驚いたように、ジャスティンは俺を見下ろした。

「ヒロマサ、振付に興味あるの？」

「わりと。えつと、ヒロでいいです」

よし、今度は自然なタイミングで言えたはずだ。くす、と笑つて、じゃあヒロ、とジャスティンは言い直した。

「君みたいな年から振付をちゃんと理解しようとするのは素晴らしいね。さっきのところ、一緒に考えなおしてみようか」

びっくりな提案だった。あの、ジャスティン・ハリスが、俺の意見を聞きながら、振付を直してくれる。信じられない。俺は驚きすぎて、心配したジャスティンが、嫌？と重ねて聞いてくるまで、馬鹿みたいに彼を見上げていた。

始めて見ると、こと振付に関して、ジャスティンはリザよりも鬼だった。なかなかお互い意見が合わないし、二人ともこれは良さそうだと思つても、ジェイはちよつとでも気に入らない部分があると、何回でもやり直しを命令した。しかもだんだん前後に広がつて、その前の短いステップもやることになった。最終的に両方が納得する振付に収まったのは、たっぷり一時間は経つた後だった。

「建設的な議論だったようねえ。でもジェイ、時間は大丈夫？」

リザもさすがに苦笑いだ。本当は、他の子も見て欲しかったんだろう。俺がジャスティンを独り占めしてしまったので、リザは困ったのかもしれない。俺は少し恥ずかしくなった。

「ジェイ、ヒロだけじゃなくて、俺も見てよ。俺も新プロなんだ」
いつの間にかやってきたウィルはふくれっつらだ。

「良いけど、振付変えろって言っても文句言うんじゃないよ」

「ヒロの文句は聞いたじゃん」

「ヒロは疲れるから嫌だ、なんて言わないからね」

じゃあ見てるよ、と言い残してリンクの中央に滑っていくウィルを見送りながら、彼は再び俺に話しかけた。

「面白かったよ。そのうち、君の振付をやってみたいな」

「それは母さんに相談かなあ。あなたは高そうだから」

一時間も話しているうちに、俺はちよつと碎けた口調になっていた。

「君にならサービスしてあげるよ。1小節に1時間かかってもね」

俺は思わず嘔き出してしまった。

「1時間？ 振付に何週間かけるの？」

「うーん、一月くらい？ でも楽しい仕事になりそうだね」

それは俺も同意できる。この人とはやっぱり少しずつずれているけど、でも話しているのととても楽しい。ちよつとした感覚が、こんなにも正しく伝わる人は、初めてだった。

「うん、すごく楽しいと思う」

思わず大きく頷きすぎた。冗談を本気にしすぎているように見えてしまったかな、と不安になったけど、ジャスティンは気にしなかった。

「いつか、やろうね」

いつもの笑顔で、ジャスティンは優しく言った。もう一度、今度は軽く頷いて、滑り始めたウィルを、二人で真面目に見ることにした。

年が明けて、北米各国の国内選手権が始まった。この試合で、2月のオリンピックの代表が決まる。カナダ男子は予想通りジョージ・ブラウンとアイザック・バーリングだった。昨年の世界選手権はブラウンが6位、バーリングは去年の国内選手権は3位だったため、出場出来ない。ブラウンはもう26歳で、今シーズンのグランプリシリーズの成績はパツとしない。メダルが取れたらラッキー、入賞できれば合格、というところだ。スケート大国カナダとしてはありえない事態だけど、ジャクソン・プライス一人に期待をかけて若手の育成に手を抜き、彼の電撃引退を予測もなかったツケが回ってきている。女子はフランシーが優勝争いに絡めそうだから、メディアが取り上げるのはそっちはかりだ。

アメリカはメイヤーと若手のアンダーソン、ベテランのクック。アンダーソンは去年春の世界選手権で銅メダルを取ったけど、「雷帝」とも呼ばれるゼレノフを相手に金メダル争いに絡めるとは思えない。北米男子がメダルを取るの難しい大会になりそうだった。

シニアのオリンピック代表選考が行われた一方、ウィルは国内選手権のジュニア部門をぶっちぎりで優勝した。フリーは1転倒1ミス、シヨートも完璧でなかった13歳があっさり優勝してしまうのが、今のカナダジュニアのレベルだ。ウィルは跳びぬけているけど、それ以外はぱつとした選手が見当たらない。ウィルも自分の演技と結果には納得していなくて、しばらくふてくされていた。GOEは低めに出たし、ミスがあったことを差し引いても、PCSは予想より低かった。それでも2位に大差をつけての優勝だった。

ジュニアの試合は平日だったから、試合に出るわけでもない俺が見に行くことはできなかった。ウィルが試合に出ている間、リザのいないリンクで、俺は黙って練習するしかなかった。トリグラフま

で3ヶ月だ。集中しなければいけない。

あれ以来俺を気に入ったのか、ジャスティンは定期的に見に来てくれるけど、彼の前で完璧なプログラムを滑りきったことは一度もなかった。というより、最初に見せたときが一番マシな出来だった。あの後からどんどんジャンプが崩れだして、何事かと思ったら、どうも身長が伸びていることが原因のようだった。体のバランスが変わったせいで、ジャンプの感覚が狂い始めたのだ。成長痛があるほどじゃなかったけど、毎回ジャンプがダブったり、ひどいとシングルになつたりした。3連続も安定しないようになって、仕方なくプログラムの後半から前半に持つてきた。そうすれば、前半で失敗しても後半でリカバリーできる。そして、俺はトリプルルツツを入れることを、リザと相談し始めた。

ルツツは難しい。夏に比べて大分できるようになったから、冒頭で慎重に跳べば、多分確実に降りることはできる。問題は、他のジャンプの何倍も神経と体力を使うことだ。でも、今のままでは、TESは伸びにくい。ダブルジャンプを一つ減らして代わりにルツツを入れれば、どこかがダブったり、転倒したりしても、カバーできる。アクセルの次に高い基礎点も魅力的だ。

この考えを聞いたジェイは、元々予定になかったジャンプを入れることに渋い顔をした。元々冒頭にあつたのはトリプルフリップダブルトゥループ。それをトリプルルツツに変えるとなったら、振付も、全体のバランスも変わってくる。それがPCSに影響を出さんじゃないかと、ジェイは言った。ルツツも合わせて全部ちゃんと跳べば、5種類のトリプルジャンプを全部揃えたことで、評価が上がるかもしれないけど、どこかがダブル可能性が高い以上、あまり期待はできない。

「でも、このままじゃ勝てないよ。勝てないってわかってるのに、何もしないで手をこまねいているのは嫌なんだ」

俺は必死にそう訴えた。

「ヒ口、勝ちたいの？ ウィルに？」

何度目かのやりとりの後、ジェイはため息をついて、そう俺に聞いた。勝つために滑ることを、あまり歓迎しないような口ぶりだった。

「誰かに勝ちたいっていうより……もつと良い方法があるのに、それにトライしようともしないのは、嫌だ」

ジェイの目を見るのが怖くて、俺は下の氷を見ながら、答えた。

「……わかったよ」

勝手にしろ、と言われる気がして、俺はびくっつと肩を揺らした。

でも、ジェイはぜんぜん違うことを言った。

「君って負けず嫌いだね。昔の僕を思い出すよ。……振り付け、直してあげる。今から日本に行つて直してもらつわけにも行かないんだろ」

シヨートもフリーも、俺に振りつけたのは日本の振付師だ。直して欲しいなら、俺が日本に行かなければいけない。その時間はないし、振付師も忙しいから、会ってくれないかもしれない。

「いいの？」

意外な言葉に、俺はジェイを見上げた。この人は売れっ子で、いつも忙しい。

「君とリザの二人で直そうとしたら、大変なことになるからね。僕も彼女と二人で自分の振り付けを直したことがあるから、わかるんだ。リザの生徒にアドバイスするのは、昔からよくやってたし、気にしなくていいよ」

お金のことも、と暗にその声は言っていた。俺は気になったけど、怖くて聞けなかった。

1月の後半にジャンプ構成を変更した後は、俺は以前以上に失敗を繰り返すようになった。ジェイは急いで時間を作ってくれたけど、それが忙しい合間をぬって捻り出したものだということはわかりきっていた。だから、俺は大人しく彼の言うことを聞いて、前みたいに言い返したりしなかった。思ったより早く仕上がった分、振りには慣れないところが多くて、なかなか俺の身体に馴染まなかった。で

も、その後は慣れが出てきて、次第に完成度を上げられるようになっていった。それでも一つ二つダブるのは仕方がない。

俺は、段々ジャンプが全部跳べるようになって、リザの予想する点数が上がっていくのが、楽しくてたまらなかった。年が明けてから中々ジャンプが安定しなかったあのイライラから、次第に身体が解き放たれていく気がした。うまく幅のあるジャンプが跳べた時なんかは、背中に羽が生えたみたいだった。

ちょうどジャンプが安定し始めたころ、中国でオリンピックが行われた。男子シングルは、まさに「大穴」と呼ばれる展開だった。ユーロをぶつちぎりで優勝したレオニード・ゼレノフは、金メダルの大本命としてシヨート1位につけた。フリーも悪くない演技だった。普通なら優勝だ。でも、自爆率の高さで知られるヨハン・ハネルがまさかのパーフェクト演技を見せた。トゥループとサルコウの4回転2本に加え、トリプルアクセル2本も難なく成功。うち、片方はトリプルアクセル トリプルトゥループだった。もちろん、それ以外のトリプルジャンプも全種類、エッジエラーも回転不足もなく揃えてきている。ステップはレベル3だけど、スピンは全部レベル4。プロトコルを額縁に入れて飾っておきたくなるような、隙のない4分半だった。元々表現力は高い選手なので、PCSも高く出る。シヨートの数点差はあっさり逆転された。

オペラ「ニーベルングの指環」。そのエッジワークから、振付から、勇壮なオーケストラのうねりが流れだすようだった。ウィルと二人だけで、トンブソン氏の解説も耳に入らず、俺たちは息をするのも忘れて、その奇跡の演技を見つめた。どんな人だって、目が釘付けになっただろう。こんな演技がしたい。強く、強く、そう思った。

2月の下旬、女子の試合が行われて、18歳のフランス・オルコットが銀メダルを取った。4年前、19歳で金メダルに輝いた、レイモンド・シュタールに続く快拳だ。フランスーはリーズの選手だから、喜びもひとしおだった。でも、お祭り騒ぎに加わるのを我慢して、俺は練習を続けた。おかげで、2月の終わりには、安定して冒頭のルッツが跳べるようになり、後半で二つくらいミスをするものの、通してみるとそこその完成度で跳べるようになった。トリグラフのエントリーはまもなく締切だ。どこもぎりぎりに出すけど、いよいよ大舞台が近づいてきた気がして、ふつふつと血が沸く気持ちを抑え切れなかった。俺のテンションの高さに、同じくトリグラフに出るウィルがちょっと引いたくらいだ。俺たちのエントリーをリザが決めたとき、初めての対決だ、負けないぞ、と堂々たるライバル宣言をしたのはウィルだったけど、先にやる気満々になったのは俺だった。

エキシビジョンの前日、リザが帰国してきた。フランスーはまだ中国にいるけど、リザは彼女以外にも教え子がいる。外国でゆつくりしている時間はなかった。その日、俺はすごく調子が良かった。2週間ぶりにリザに会って、練習の成果をしっかりと見せたかった。最初のルッツを着氷し、前半は2連続にして、後半上手く跳べたサルコウを3連続にした。最後の直前のジャンプまで、まったくミスがなかったのは、これが初めてだった。よくダブってしまうループを着氷し、3連続も跳べた後から、背中を興奮が走り抜けているのを感じた。

もっと跳べる。もっと

世界のすべてが、きらめいて見えた。母さんがここにいればいいのに、と思った。そんな、余計なことを考えている余裕すらあった。きっと喜ぶだろう。きっと、この興奮を分かち合ってくれだろう。

足首に違和感を感じたのは、氷に叩きつけられる直前だった。

「ヒロ！」

氷の冷たさに気づくよりも先に、背中に鋭い痛みが走った。受身を取るうとしたけど、もう遅かった。

リザの叫びが、とても遠く、聞こえた。

すぐにメデイカルドクターが呼ばれ、担架で運ばれる。そのことを、俺はまるで他人のことのように感じていた。

足首の捻挫、及び背中への打ち身。

安静1週間、全治1ヶ月。

それが俺に下された診断である。

トリグラフは無理だった。リザから日本スケート連盟に連絡が行き、提出直前だったエントリーは速やかに書き換えられた。

「……ヒロ」

兄と一緒に病院へ俺を迎えに来たウィルは、途方にくれたような顔で俺を迎えた。

そんな顔をされたら、八つ当たりもできない。

「バカ、君が泣いてどうするんだ」

「だって、トリグラフ、一緒に行こうって言ったのに……」

「来年があるだろ。それに、サマースケートとか、コペンハーゲンとか……」

「でも……」

ウィルはちよつと目を潤ませた。

俺は国際大会に出たことがないし、ここ一年近く、日本国内の大会にも出ていない。トリグラフで結果が残せないという事実は、色んな人を失望させるだろう。俺が転倒したのを見て駆け寄ってきたとき、リザは今まで一度も見たことがないような、怖い顔をしていた。

「気をつけなさい」

リザは、それだけ言った。

怒りはしなかつたけど、いたわりの言葉もなかつた。せつかく日本から連れてきたのに、肝心なところで結果を出せないなんて、意味がない。そう思ったのかもしれない。日本のスケート連盟だって、がっかりだと思っただろう。そして　母さんも。

「浩、大丈夫なの？　痛い？」

スカイプ越しに見る母は、少しやつれていた。引越しの準備と、仕事の引継ぎで忙しいんだろう。その上、俺の怪我だ。

「痛くはあんまりないよ」

「そう……残念だったわね、トリグラフ」

「うん……ごめん、母さん、楽しみにしてたのに」

新しいプログラムを、母さんは見たことがない。トリグラフで見せてあげる、とずっと約束していたのだ。

「いいのよ。カナダに行ったら、いつでもあなたのプログラムは見られるわ。それより、浩正のほうが心配よ。年が明けてからこっち、ずっと楽しみにしていたでしょう」

「うん……」

俺はうなずいた。こうして部屋で母と2人きりになると、悔しさがこみ上げてきて、泣きたくなった。母さんの喜ぶ顔が見たかった。半年も離れていた代わりに、とびっきりの演技で、とびっきりの笑顔を見たかった

でも、泣くわけには行かなかった。今俺が泣いても、母はここに飛んでくることはできない。海の間こうで、毎日毎日、心配をしながら過ごすだけだ。俺を一人でカナダに送り出したことを後悔して、今そばにいられない自分を責めて、ひよっとしたらスケートを始めさせた事自体間違いだっただと思うかもしれない。そんなのは耐えられない。

「大丈夫だよ、ちゃんと、1ヶ月大人しくして、上半身鍛えてるから。一月経ったら、またリンクに戻るし、もう一回頑張るよ」

用意していた言葉を俺は一気に言った。

「浩……」

カメラの向こうで、母は不安げに眉を寄せていた。

「ねえ、浩、無理はしないでね。これから何回もこんなことがあるわ。耐えられなかったら……」

「大丈夫だよ！」

俺ははつきりと母の目を見て、断言した。

母さんにそんな顔をさせたくて、スケートを続けているんじゃない。

「無理なんかしてない。俺、まだスケート続けたい」

「……そうね」

母が俺の言葉を、心から信じたかどうかはわからない。でも、それは俺の本心でもあった。

翌日、2月最後の日は、オリンピックのエキシビションだった。

リチャードは仕事、エドワードは大学、ウィルは練習。トンプソン氏はまだ中国にいる。医者とりざに安静するように言われて、練習にも行けない俺は、一人テレビの放送を見た。

エキシビションはいつもと同じように、各カテゴリー上位5人の選手が滑る。順番を入れ替えてランダムにすることもあるけど、今回は下位から順番通りだ。5位になってしまったアレックス・アンダーソンから始まって、ヨハン・ハネルまで。日本の加藤選手も出ている。時々リンクで会ったことがある。あまり好きな人ではなかったけど、すごい選手であることに変わりはない。あと一歩でメダルに届かなかったのが悔しかったのが、エキシなのにトリプルアクセルを跳んだ。

18歳で銀メダルに輝いたフランシーは、"Over the Rainbow"。偶然にも俺のフリーと同じ曲だった。彼女のやわらかい雰囲気と合っていて、大人っぽくしっとりした曲が多い中、特に印象に残った。

ペア、女子シングル、アイスダンス、と来て、トリが、「ニーベ

ルングの指輪」で会場を魅了したハネルだった。エキシブプログラムはエンヤの「Long Long Journey」。長い長い暗い旅路を抜けて、辿り着く場所……勇壮さには欠けていたけど、その分、ハネルの全身から、エネルギーが溢れでていた。すべてを達成した充実感が、彼のスケートを、力強く、伸びやかなものにしていった。

一蹴り踏み出すごとに、彼は輝く。美しい歌声が、滑らかなスケーティングから湧き上がるみたいだ。夢のように美しいプログラムだった。でも俺は、その美しいプログラムにひたることはできず、ずっと、自分のことを考えていた。2週間前、ハネルが思いがけず優勝したときはすごく嬉しかったのに、今は別の気持ちのほうが強かった。

うらやましい。

ハネルは、上手くできなかつた時代を乗り越えて、今、頂点にいる。でも俺はどうだろう。自分とオリンピックチャンピオンを比べるなんて、バカバカしかったけれど、なぜか考えずにはいられなかつた。俺はあんなふうに、一番上に立てるんだろうか。1ヶ月は長い。その間に、またルッツが跳べなくなるんじゃないだろうか。捻挫って癖になるらしいし、怪我がちになって、選手を諦めることになるんじゃないだろうか。そこまで行かなくても、長時間の練習が難しくなって、トリプルアクセルにたどり着けなくなるんじゃないだろうか。アクセルが跳べるようになるには、これからもっともつと練習しなければいけないのに。トリプルアクセルが跳べなければ、男子シングルの選手としてトップに行くのは絶対に無理だ。

ワールドでメダルを取るようなトップ選手でも、怪我で消えて行った人は少なくない。そこにたどり着く前に、怪我でスケートを続けることを断念する人は、数えきれないほどたくさんいる。フィギュアスケートって、見た目は綺麗だけど、過酷なスポーツだ。それ

は、よくよくわかっていった。でも俺は消えたくない。何も残さずに、
終わりたいくない。俺を支えてくれた人たちを、がっかりさせたくない。
い。

氷の上に戻るまで、1ヶ月。

氷上練習ができなくても、身体は維持しなければならない。ウィルが氷の上で練習している間、俺は毎日ジムに通い続けた。元々陸上訓練はウィルといっしょにすることが多かったけど、今は時間が違った。そのほうが気が楽だった。今日は何をしたとか、あまり聞かなくて済む。来る日も来る日も一人で、トレーナーの指示通りに黙々と訓練は続けた。ジリジリとした不安が、足元を焦がし続けているみたいだった。リンクにいたら、きっと氷の冷たさでそんな不安もなくなるのに、なんてくだらないことまで考えた。

怪我のことがあってから、トンプソン家の人々は色々俺を気遣ってくれていた。エドワードが遊びに連れ出してくれたり、ウィルのゲーム時間を大目に見てくれたりしたけど、彼らをも失望させたのだと思うと、心は一気に沈んだ。

トンプソン家の人たちは仕方ないけど、それ以外の人に会いたくなかった。リンクに行かないから、リザとはあまり話さなくなったり、スカイプにも上がらないようにした。弱音を吐いても、日本にいる母は何も出来ない。無駄に心配させるのは嫌だった。

そうして1週間くらい経ったある日、一人でジムに入ると、横から声をかけられた。

「やあ、ヒロ」

「ジェイ」

俺はリンクにいないから、会うこともないと思っていた。

意外に思ったのが顔に出たんだろう、最近、元気がないって聞いたから、とジェイは説明した。

「怪我したんだってね。リザが残念がってたよ」

「うん、知ってる」

素っ気ない言い方になってしまった。ジェイに八つ当たりなんか

したくないのに。

ジェイは俺を見下ろして、何度か瞬きした後、静かに言った。

「……ちょっと、場所移そうか」

人の来なさそうな会議室の場所に俺を先に行かせて、ちょっと待ってて、飲み物買ってくる、とジェイは小走りに行ってしまった。

捻挫した右足をかばいながら会議室に入ると、ジェイもすぐに戻ってきた。持っているのは近所のカフェチェーンの紙カップだ。

「はい。ラテにしたけど、良かった？」

コーヒーを手渡されて、俺は困った。母はコーヒーが飲めない人で、家でコーヒーを入れたことはなかった。俺も未知の飲み物に手を出そうとは思わなかったから、今まで飲んだことがなかったのだ。「もしかして、飲めない？」

戸惑ったのが顔に出たのか、ジェイが不安そうに、重ねて聞いた。なんでもないふりをして受け取れば良かった。せつかく買って来てくれたのに。

「ううん、飲んだことなくて……」

「ごめん、両方ともコーヒーなんだ。日本人だったこと、忘れてたよ」

「いや、日本人でもコーヒーは飲むけど……俺は、単に母さんがコーヒー苦手で。飲んでみる」

ジェイを困らせたくなくて、俺は止められる前に口をつけてみた。まずくても、おいしいって言うつもりだったけど、そんな無理をする必要はなかった。

「あ、おいしい」

初めて体験する味だった。香ばしさと、ほんのりした苦味が合っている。

ジェイは用心深く俺の顔を見ていたけど、無理をしているわけじゃないらしいのがわかったみたいで、良かった、と言って、ようやく自分の分の蓋を開けた。

「父さんは、コーヒー好きなのかな」

母はまったく飲めないのだから、多分そういうことになるだろう。俺はなにげないつぶやきに、ジエイは少し戸惑ったようだった。

「ヒロは、お父さんのこと、知らないの？」

「うん。聞いてない？」

意外だった。リザかミスター・トンプソンあたりから聞いているかと思っていた。

「他人が勝手に聞いて良い話じゃないからね
なるほど。大人だ。」

「別に、たいした話じゃないんだ。俺も気にしてないし。ただ、俺が生まれた時、父親はもういなかったっていうだけ。母さんはまだその人のこと好きみたいで、その話題になると悲しそうだから、俺も聞かない」

父と死別したわけではないことを、ジエイは俺の話し方から感じ取ったようだった。

「君は、僕の小さい頃に、ちょっと似ているね」
ため息を付くように、ジエイは言った。

「どうして？」

この人は今でもよく両親の話をする。俺とは全然違う育ちのはずだ。

「小さい頭で、何でもかんでも一人で考えて、自分だけでどうにかしようとしてしまうんだ。そんなこと、できっこないのに」

俺はちよつと赤くなつた。「ませている」とは時々言われたけど、そんなの同級生の悪口が大半だからあまり気にしてなかった。でも、今は言っている相手が違う。

「それが悪いと言ってるわけじゃないよ」

俺の頭に手を置いて、ジエイは柔らかく笑った。

「君はとても落ち着きのある良い子だ。ただ、何でも一人で溜め込んでしまうから、僕たち大人は心配なんだ」

言っている意味はわかるけど、具体的に何のことなのかわからなくて、俺はぼかんとジエイを見上げた。

「怪我をしたら、普通はもつと愚痴を言ったり、早く滑りたいってわめいたり、もう無理だスケートやめるってヤケになったりするものなのに、君は何も言わないで、黙ってトレーニングを続けるだけ。これほど手がかからなくてありがたい生徒はいないけど、同時に心配なんだよ」

「リザも？」

「もちろん。無理を言って日本から来させて、しかも一人でホームステイだし、拳句に試合に出る前に怪我なんかさせちゃっただろ。リザはとても気にしているんだよ」

「……だって」

なに、とジェイは優しく聞いた。俺は言おうかどうか迷った。リザはきつとがっかりしている。そう思っていた。それを言っ、うん、そうだ、と言われたらどうしよう。ジェイは急かすこともなく、グレーの瞳をじつと俺に向けて、俺が続きを言うのを待っていた。

「リザはがっかりしてると思ってた」

「そりゃ、そうだろうね。一緒に頑張ってきたんだから、残念には思うよ。でも、彼女はそんなことで選手を責める人じゃないよ。僕だって同じことがあったしね」

「ジェイも？」

俺はよほど意外そうな顔をしていたのか、ジェイはちよつと笑った。

「しかも君よりもつと残念なシチュエーションだった。……シニアの2年目に、GPSで2位と3位に滑りこんで、初めてGPFに行けることになったんだ」

グランプリシリーズは、シーズン前半のハイライトだ。トップ選手はだいたい2戦エントリーして、順位ごとのポイントを貰う。ポイントの上位6人がその後のグランプリファイナルに参加できる。年明けの各選手権に比べると、試合としての格はやや低く見られがちだけど、それでも上位6人に残ることは、若手選手にとっては大きな実績になる。

「でも、ファイナルに行く前になって、2戦目から感じていた右足首の痛みがひどくなった。結局、ファイナルは棄権したよ」

俺は目を見開いて、ジェイを見つめた。すべてのジャンプは、右足一本で降りる。それだけ足首にかかる負担は大きく、足の怪我は致命的になる。

「GPFを棄権しろ、と言われたときは、絶対に嫌だってわめいて、リザを困らせたよ。でも、リザが無理やり棄権させなくても無理なものは無理だった。痛みでジャンプが跳べなかったんだから」

初めてたどり着いたグランプリファイナル。それは、俺のトリグライフなんかとは比べものにならないほど、大切で、かけがえのないものだろう。でも、ジェイは出られなかったのだ。

そんな顔するなよ、と長い指が、ぐしゃぐしゃと俺の髪をかき混ぜた。

「さらさらだね。うらやましいよ」

「うん、これだけは母さんに似たんだ。後、眼の色」

どちらも、ほんの少しだけ母より薄い色だけど、全く似てない顔立ちと肌色に比べたらずっとずっと似ていると言える。

「素敵な色と手触りだ」

目を細めて、ジェイは俺を見下ろした。冬に会ったときに比べて、視線は、少し近くなった気がする。

名残惜しそうに俺の髪から手を離して、ジェイは軽く俺の背中を叩いた。

「怪我をせずにトップまでたどり着く選手なんていないよ。たどり着いた後も、困難はいっぱいある。僕も、もうやめようと思ったことはたくさんあったよ」

それも意外？と、ジェイは俺の顔を見て笑った。

「ちよつと」

素直に答えると、彼は懐かしそうに宙を見た。

「一番きつかったのは、最初のオリンピックの後、怪我でワールド出場を逃した時かな。本気で引退を考えたよ。カナダチャンピオン

にはもうなつてたし、ワールドのメダルも持ってたから、ショーには出られるし、もういいんじゃないか、って」

「どうして戻ろうと思ったの？」

この真面目な人が、スケートを投げ出そうとするくらいだから、怪我は相当重かったんだろう。その状態から、試合に戻ろうとするのは、とても勇気が要ることだ。

「オリンピックにもう一度出たかったのが一つ。結局負けず嫌いだつたのもある。……でも一番は、僕のことを認めてくれた人がいたこと」

ジェイはまた宙を見て、思い出すように言った。

「僕のスケートを愛しているから、僕に戻る気があるなら、いつまででも待っている。でも競技をやめてしまっても、その気持ちは変わらない。すごく気持ちが悪くて、何もかも捨ててしまいたい気持ちになっていたときに、そう言われたんだ」

とても懐かしそうに、ジェイは言った。

「フアンの人？」

「そうだね」

フィギュアスケートのファンは熱心だ。でも、そこまで言えるなんてすごい。ジェイのようにカリスマ性のあるスケーターだからこそ、そこまで言えるファンもつくんだろう。

「俺、まだそんなファンはいないと思う」

日本の熱心なファンの中には、有望なノービスとして俺に目をかけてくれる人もいたけど、ずっと待つてはくれないだろう。

拗ねたような俺の言葉に、ジェイは軽く笑った。

「近いうちにできるよ。諦めなければ、君はすぐにそういうところまでいける」

俺はジェイを見上げた。本当に、と聞きたかったけど、聞くのが怖くもあった。

「大丈夫。リザの言うことをしっかり聞いて、戻っておいで。冬は長くて辛いけど、遠くないうちに、春も来るよ」

「その間に、置いて行かれない？」

ずっと言えなかった恐れを、おそろおそろ吐き出すと、ジェイは励ますように俺に微笑んだ。

「なにがあっても、同じ場所で、君を待ってるよ」

それはとても力強く、温かい言葉だった。

涙を隠すためにうつむいた俺の背中を、彼は優しく撫で続けた。

一月は途方もなく長く思えたけど、ジエイの言った通り、段々とやってくる春の気配が、俺の心を和ませていた。日本に比べればまだ春は遠いけど、雪はほとんど降らなくなって、段々と校庭や公園に花が咲き始めた。母が好きなスイセンが待ち遠しかった。こちらでは4月の花なのだ。ちょうど、母がカナダに来るになるだろう。この一月をこらえて、春になったら、母さんが来る。ジエイに励まされたものの、相変わらず氷に乗れない俺にとって、それは唯一の慰めのように思えた。

でも、母が来るということは、トンブソン家を出るということでもあった。この半年間、本物の兄弟みたいに、いつもウィルと一緒にだった。そんな毎日が、もうすぐ終わるのだ。

「寂しくなるなー」

「ウィル、それ5回目」

3月下旬。

ちよつとずつ引越す荷造りを始めている俺を眺めながら、ウィルは戸口でふくれつつらだ。このふくれつつらもすっかり見慣れてしまった。

「だって、ヒロはずっとここにいる気がしてたんだもん。今更出ていくって言われたってさ」

「最初から半年って話だっただろ」

本当のことを言うと、俺も、ウィルと一緒に、トンブソン家で暮らす日々がずっと続くような気がしていた。少し前、母に家の下見に行つて欲しいと言われて、ようやくこれが期限付きだったと思いだしたのだ。一緒に行つたウィルが騒ぎ出したのもその後からだ。つまりは俺もウィルと一緒に。でもそれをここで言ったら、ウィルを止められなくなる。俺はぐっところえて、黙ってダンボール

ごとに荷物を整理した。

「なー、ヒロ、ここに住み続けられないの?」

「母さんとウイルなら母さんを選ぶ」

「ひどい!」

「ウイルだってジエシカさんと俺だったらジエシカさん選ぶだろ」

ウイルは返事に詰まった。あれこれ言うけど、ウイルだって結局はマザコンだ。

「じゃあさ、ヒロのお母さんもうちに住むとか」

「バカ」

俺は短く、一言だけ言った。

世間からどう見えるか、よく考える。

俺の素っ気ない罵りにウイルはまたうーっと頬をふくらませたけど、それ以上は言わなかった。大人にばかり囲まれて育って、ませてしまったのはウイルも同じだ。いやむしろ、ショービズの世界にどっぷりのウイルのほうが、そういうゴシップめいた話には敏感かもしれない。

「あんな、俺だって寂しいことは寂しい」

荷造りの手を止めて、入ってこいよ、とウイルに言った。

これは本心だ。先にカナダに来て良かった。心からそう思う。この半年、本当にいつでも一緒だった。朝一緒に学校へ行行って、学校が終わったらリンクで練習して、また一緒に帰ってきた。俺がホームシックにならずに済んだのも、ずっとウイルが傍にいてくれたのが大きいと思う。

「本当?」

ウイルは疑わしげだ。

「本当。ウイルと一緒にじゃなかったら、たとえ母さんと一緒でも、カナダに来て最初の数ヶ月はずっと辛かったと思う。すごく感謝してる」

「……………それほどでも」

急に頬を赤くして、ウイルはそっぽを向いた。

「でも、ずっとは無理だ。俺の苗字はトンプソンじゃないんだし」
特に意味を持って言ったつもりじゃなかったのに、そう言った瞬間、チクリと心臓に棘が刺さったような気がした。もし　もし、俺に父が、いたら。

考えてもしようがない。そんなの母を傷つけるだけだ。一瞬浮かんだ考えを振り払うように、俺は何かを言いたげなウィルに向かって続けた。

「引っ越しても、学校もスケートもダンスも一緒だろ？」

「そうだけど……」

ウィルはやっぱり寂しいらしい。

「またいつだって会えるし、遊びに来るよ。ウィルも遊びに来いよ。母さんは留守がちだから、ゲームし放題だぜ」

これは切り札だった。

俺と母のところになれば、からかう兄もいないし、やかましく小言を言う親もいない。ウィルにとっては天国だ。

「楽しみにしてるからな、約束破るなよ！」

「破らないよ」

ウィルの顔がちょっと晴れた。俺はそれを見て、ほっとした。半年の間に、俺はすっかりウィルの3人目の兄になってしまったようだった。

17 (後書き)

久しぶりなのに短くてすみません。
次はウィルの試合なので濃くなる予定。

3月末、トリグラフトロフィー。場所はスロベニア。ノービスジュニアの下の、10歳から出られる部門がある、貴重な大会だ。若いうちにこの試合のノービス部門で優勝し、のちのち超一流になった選手も多い。ウィルは去年の8月、スケート・コペンハーゲンのノービスに一度出場したことがあるけど、4位という振るわない成績だった。あいつの実力から言って、本来はあっさり優勝をさらうくらいが普通だ。それなのに表彰台にも乗れなかったのは、プレッシャーによるミスが原因。ウィルはそれが悔しくてたまらなかつたらしい。

俺というライバルが消えた今、ウィルの目標はただ一つ。文句なしの圧勝、だった。

久しぶりの大きな国際大会とあって、トンブソン家の人たちも張り切っていた。エドワード以外は、皆予定に都合をつけてスロベニアに行く。エドは大学の試験があって、どうしても学校に行かなければならぬらしい。

半年もお世話になったのだから、礼儀として俺もウィルの応援団に加わるべきだったかもしれないけど、俺は行かなかった。どんな顔で、自分が出ていたはずの試合を観客席から見ればいいんだ。そんな俺の気持ちを探っていたのか、みんな最初から俺を誘うことはなかった。俺はエドワードと二人、カナダに残った。試合は向こうでは午後で、こちらは午前中。ネットは中継でも見れるけど、俺のパソコンのスペックだと難しい。だから、文字だけの実況を見ようかと思っていた。

朝ごはんはエドと二人だけだった。エドはオムレツを作ってくれたけど、あまり話はせず、二人で黙ってシリアルとオムレツを食べた。エドはちょっとだけ苦手だ。年が離れているリッキーのほうは、

優しく話しやすい。話しかけても必要最低限しか答えてくれないし、向こうから声をかけてくることはあまりない。ウィルとしゃちゅう喧嘩しているのを見ると、別に無口というわけでもなさそうだけど、俺とは話すことがないらしい。

「ごはんを食べ終わって、エドにお礼を言って席を立とうとした時、ふいにエドが言った。

「ヒロ、後で、一緒にストーリーミング見ないか」

「トリグラフの？」

他に何があるんだよ、とエドは笑った。

「俺のパソコンから、テレビに繋いで。デカイ画面で見たほうがいいだろ」

「テスト、明日じゃないの？」

「今更復習するほどじゃねえよ」

エドはあまり大学の話をしない。俺が知っているのは、行っているのがトロント大で、スポーツ医学を勉強しているらしい、ということだけだ。トロント大なのに大丈夫なのかな、と俺は思った。カナダレベルの高い大学なんだから、テストも一番難しいんじゃないだろうか。でも、俺はそれ以上聞かず、素直に見たいと言った。

時間になると、リビングにパソコンを持ち込んだエドは、ときどきとコードをテレビに繋いで、動画の画面を出した。この家では彼が一番機械に強い。パパッとコードを繋いで、カタカタッとキーを打って、あっといいう間に設定するのを見て、母さんを思い出した。女の人って機械音痴が多いらしいけど、母さんは全然そんなことなかった。

設定が終わると、エドはキッチンに行って、コーヒーを入れた。

「カフェオレか？」と聞かれて、俺は慌てて「自分でやります」と言った。俺の分まで用意してくれたらしい。

「じゃ、自分でやれ」

エドはあっさり言って、自分の分だけ持ってさっさとソファに座った。こういう素っ気無いところが、やっぱり、ちょっとだけ苦手

だ。

カフェオレを持ってエドの隣に座ると、中継はもう始まっていて、空っぽのリンクが映っていた。

ノービスの試合だから、観客席にはほとんど人がいない。カメラは目ざとく客席のトンプソン氏を見つけて、アップにして映してた。撮影しているのはスケートのファンなんだろう。気づいたトンプソン氏は愛想良く手を振り、サービスで変顔までしてみせた。親父、主役勘違いしてるだろ、とエドが毒づいた。

カメラはしばらく暇そうに観客席の関係者を映していたけど、選手が出てきてウォーミングアップを始めると、リンクに映像を戻した。

ウィルは調子が良さそうだった。キレのあるトリプルルッツダブルトゥループのコンビネーションを決めて、自慢気な顔をしている。まわりの威嚇の夢中になって、集中力散らしたりするなよ、と俺は内心祈った。

「調子乗ってんな」

エドもそう思ったらしい。顔をしかめて、綺麗なトリプルフリックを決めたウィルを睨んだ。

ショートプログラム。予想通り 本当にかっかりするほど予想通り、ウィルは調子に乗りすぎて、最後のジャンプでステップングアウト、おまけにスピンドレベルを取りこぼした。回転数が足りないという単純ミスだった。

「あのバカ」

トリプルフリックをステップングアウトするのを見て、忌々しそうにエドは舌打ちした。

「無茶な降り方しやがって。怪我するぞ」

怒ったのはミスをしたことではなく、そつちらしい。ステップングアウトの後、手をつかないように無理に勢いを殺したやり方は、たしかに下手をすれば怪我をしかねない。

それでも得点はそれなりに高かった。リザに何か小言を言われて

むくれていた顔が、ぱつと明るくなる。

「しょうがないやつだな」

無邪気に喜んでいられるウィルから、次の選手に画像が切り替わると、エドはため息をついて、立ち上がった。

「まだ見てくか？」

エドがいないのに見るのもなんだか気が引けるけど、他の選手も見たい。俺はちょっと迷って、頷いた。エドは別に気にしたふうでもなく、軽く頷いた。

「後で片付けるから、終わったらテレビの電源だけ切っといってくれ。明日も見るか？」

明日はフリーだ。月曜だから学校があるけど、今日より時間が早くて、こっちは朝5時くらい。頑張って早起きすればみられる。

「テストじゃないんですか？」

「午後だ」

テスト当日なんて、練習でもない限りは必死に復習するけど、エドには関係ないようだ。

「じゃ、明日」

ひらひら手を振って、エドはさっさと部屋に戻った。

翌日のフリー、ウィルは2位に大差をつけて優勝した。PCSはあまり伸びなかったけど、出来栄え点は比較的出ていた。トリプルルッツ2本を含むトリプルジャンプ5種を揃えて、うちひとつはセカンドトリプルのコンビネーション。ちよつとだけミスはあったけど、ノービスとしてはトップ中のトップに入る演技だった。

セカンドトリプルの着氷で無理な体勢になったときは嫌な顔をしたエドも、演技の終わりには笑顔がこぼれていた。表彰式の後、まだ登校には時間があると言って、俺に電話をかせさせたけど、本当はエドが一番祝いたかったんだろう。

「ヒロ、俺、やったぜ！」

電話の向こうのウィルは嬉しそうに親指を立てた。

「おめでとう。フリー、良かったよ」

「だろ？ 会心の出来だぜ。さつきジャッジにもすごい褒められてさー」

「良かったな。おめでとう」

いらつとくる気持ちを抑えて、俺はもう一度お祝いを言った。電話をかける前は、良かった、と素直に思っていた。思っていたけど、ウィルの自慢に、心の端っことから、少しずつチリチリと火が燃え出しているような気がしていた。ちょうど後ろで様子を見ていたエドが、手を差し出してきたので、俺は受話器を渡した。

「何が会心の出来だよ。どうせショートの後、リザに有頂天になるな集中しろって言われて、ようやくまともに演技に集中したんだろうが」

「なんだよエドー！」

喜びに水を差されて、ウィルはむっと口を尖らせた。

「変な着氷しやがって。怪我するぞ」

「今それを怒んなくなっついていいだろ」

ウィルは口では怒っていたけど、視線がきよるきよる動いている。どうやらもう誰かに注意されて、自分でも後ろめたいらしい。

エドがため息を付いた。

「ま、フリーは確かに良かったよ。お前らしい演技だった」

「本当？」

ウィルも単純なもので、ぱつと表情が変わった。

「最後のステップだな。どうだ俺すごいだろうって見せつけるつもりしかないアホ丸出しのショートのステップより、ずっとお前らしかったよ」

「なにそれ、褒めてんの」

「褒めてんだよ」

「嘘じゃないよな？」

普段喧嘩してばかりだから、素直な褒め言葉を、ウィルはなかなか信じなかった。

「本当だつて。おめでとう」

さすがに今度は信じたのか、うん、とウィルは画面越しに頷いた。

「ガラも頑張れよ」

「うん、王者の貫禄つてやつ見せつけてくるから、見てるよ、エド」
「！」

「気が向いたらな」

笑つて、エドは電話を切った。

ガラ エキシは遅い時間だから、俺は学校だ。でも家にいるエドは、きつと一人でも見るんだろう。

いいな、と思つた。

誰かに応援されて、その誰かのために滑る。それがすごく、羨ましかった。

ぼんやりしていると、もう一度ため息をついたエドが、思い出したようにこつちを見た。

「ヒロ、学校大丈夫か？」

「あ、うん、そろそろ」

時計を見て、通学カバンを取りあげる。そろそろ行かないと遅刻する。

立ち上がる俺に、ああ、とエドが声をかけた。

「そついえば、明日から氷、乗れるんだろ？」

「う、うん」

エドがちゃんと知っているとは思わなかった。

「お前も、頑張れよ」

その後、ライバルがいないと、ウィルのやつすぐ調子に乗るから、と付け加えられたけど。

頑張れ。

その言葉を心のなかでゆっくりと噛み締めてから、ありがとう、と答えた。

試合の翌日、リザが帰国した。ウィルたちはまだエキシヤバンケツトで向こうにいるけど、リザは早めの飛行機で戻ってきた。彼女の教え子はウィルだけじゃない。フランシーもいるし、ペアやアイスダンスもいる。それに、俺が1ヶ月ぶりにリンクに戻れそうだったから、というのは、自意識過剰だろうか。

久しぶりの氷は、ひどくよそよそしかった。でも、一蹴り滑り出すごとに、俺はいるべき場所に帰ってきたような気がした。一蹴り、また一蹴りと、滑ることが楽しくて仕方なかった。

フランシーの練習を見た後、リザは俺の方に来てくれた。久しぶりだから、基礎の確認から。夏の合宿の、そのまた前にやっていたようなことを、丁寧にやり直す。つまらない練習だったけど、今の俺にはそれさえも楽しかった。練習の終わり、俺は、昨日、スロベニアですべることの叶わなかったプログラムを、滑りたいとねだった。リザは気が進まなさそうだったけど、俺がしつこく頼むと、ジャンプ抜きで一度だけなら、と許してくれた。

一月も氷から離れていたのだから、もちろん色々なところでミスが出た。

でも、俺は満足だった。滑り終わって俺はリザに駆け寄った。

「どうだった？」

ミスはあったけど、精一杯やったつもりだった。リザはちょっと笑って、良かったわよ、と言った。

「おかえりなさい」

柔らかな言葉に、俺は一瞬動きが止まった。ジェイが言っていたことを思い出す。

ずっと、待ってるよ。

ジェイが怪我から戻った時も、リザはこう言ったのかもしれない。すん、とその声は胸に落ちた。俺が氷の上に帰ってくるのを、待

つてくれていた人がいる。それだけで、胸が暖かくなる気がした。そのためなら、いくらでも頑張れる気がした。いや、もっと頑張りたい。今まで遅れていた分を、取り戻したかった。

「リザ、明日から練習増やして！俺、もっと滑りたい」

「急にどうしたの」

急に決意を固めた俺に、リザはやや呆れたように答えた。

「だって、遅れていた分、取り戻したいもん。リザを待たせていた分を、さ」

「懐かしいことを言うわね」

リザは軽く笑った。

「前にも誰かがそう言ったの？」

「ジェイがね。もつとも、彼は、別の人のためのようだったけれど」「彼女とか？」

急に出てきた面白そうな話に、俺は食いついた。ジェイの彼女。想像したこともない。離婚しちゃったけど、若い頃はきつとすぐくもてたはずだ。今だってリンクのお母さんたちにこっそり熱い視線を向けられているくらいだ。

「さあ。私はとうとう、最後までその人に会わなかったから。でも、ジェイにとって大切な人だったはずよ」

彼女かどうかは、リザにもよくわからないらしい。

ジェイをずっと待っていてくれると言ったファンの人のことかな、と俺は勝手に推測した。過去形がちょっと気になった。リザの寂しそうな顔も。

一瞬通り過ぎた過去の悲しみを振り払うように、リザはちょっと怖い顔をした。

「でも、練習を増やすのはダメ。病み上がりになんか言っているの」「えーっ、とウィルのように膨れる俺に、リザは笑った。

「ヒロはジェイより良い子だと思ってたのに、あなたたちって似た者同士ね」

それはどうやら俺が悪い子という意味らしかったけど、ジェイと

似ていると言われるのは、くすぐったく、嬉しかった。

「でも俺、ジエイより良い子だよ。リザのために頑張るんだから」
「お母さんじゃなくて？」

俺はうつと黙り込んだ。リザは俺をここに呼んでくれた恩人だけど、どつちが一番かと言われたら母さんに決まっていた。なにも言えない俺に、リザはころころと笑った。

「本調子になって来たら、増やしてあげる。それに、新しいプログラムも作らないと」
「変えるの？」

意外なセリフだった。小さな大会で滑ったことはあるけど、ほとんど披露していないプログラムだ。そのまま持ち越すものとはかり思っていた。

「多分。ウィルが新しいプログラムなのに、あなたが同じプロなのは、悔しいでしょう？」

俺はちよつと想像してみた。確かに、それは悔しい。

「……うん」

「お母さんも来ることだし、気持ち切り替えて、新しいプロにするのも悪くないわ。ちよつと、心当たりがあるのよ」

リザはいたずらっぽくウィンクした。

「誰？」

「内緒よ」

「えーっ？」

俺は身を乗り出したけど、リザは最後まで教えてくれなかった。

でも、新しい振付師、新しいプログラム。重苦しかった冬の終わりを後ろに残して、新たにスタートが切れる。まとめてやってきたような春に、俺はわくわくし始めた。

4月。日本の新年度が始まって4日目に、母さんがカナダに来た。
「……随分、大きくなった？」

空港で出迎えた俺を見るなり、母は少し戸惑った顔で、首をかしながら。カナダに来たときは、ヒールを履いた母より俺がいくらか低いくらいだったけど、今は母さんを見下ろしている。

「……みたい」

「それに、ちよつとたくましくなつたみたいね。元気そうでよかつたわ」

そういう母は、少し疲れているようだ。急に海外に住むことになったのだ。それも、この先何年続くのかわかったものではない。俺はウィルン家に居候しているだけだったけど、住むところに仕事、何もかも変える準備をしてきた母さんは、大変だっただろう。

母の荷物は、日本の引越会社が先に俺たちの住むマンションに入れてくれたけど、俺の荷物は、母が到着した次の日、トンプソン家に手伝ってもらって運び入れた。来たときはスーツケース2つだったのに、気がつけばダンボール2箱分も増えていて、リチャードが車を出してくれた。

「いいって、半年住んでたんだから、あたりまえだよ」

雑誌や教科書が入ったダンボールは重くて、俺もウィルも母も持てなかつたから、結局部屋まで運ぶのもリチャードだった。何度も謝る俺に、彼は笑って手を振った。

その日の夕食は、レストランでデヴィッドたちと一緒に食べた。トンプソン家と一緒に食事をするのは、母さんにとってははじめてだ。有名人。3度の世界選手権王者。CBCのプロデューサー。そんな人とご飯を食べるなんて、と母さんは緊張しまくっていたけど、デヴィッドは色んなジョークを言い続けて、場の空気を軽くした。最後のほうは母さんも心から笑っているようで、シャンパンで少し赤くなつた顔をこっそり盗み見て、俺はほつとした。

「あー、家だ。落ち着く」

「変な子ね、初めて入つたのに」

マンションに入って既にセットされているソファに座るなりそう

言った俺に、母さんはころころと笑った。お酒に弱い人だけど、デヴィッド・トンプソンが勧めるお酒は断れなかったらしい。何杯もシャンパンを飲んだせいで、頬はまだ赤い。

「でも家だーって感じ、わかんない？」

「さあ？」

隣に座って、母は軽く俺の頭を撫でた。細い指が、さらりと髪をくぐっていく。半年ぶりの感触だ。

「やっぱり母さんがいるもん。ウィルンちもにぎやかで楽しかったけど。あそこ、3人も息子いるのに、俺まで入れるんだもんな」

「やっぱり、兄弟欲しかった？」

「ううん、別に」

俺は首を振った。兄弟。それだけは、俺がどんなに欲しがっても母が俺に与えられないものだ。ウィルの家は楽しかったけど、母さんと2人の暮らしが、それに劣るわけではない。

「俺には母さんがいれば十分」

横に座った母に甘えて抱きつくと、なあに、と母は微笑んだ。

「今日は随分甘えっ子ね」

「久しぶりなんだもん」

「じゃあ久しぶりついでに今日は一緒に寝ましようか？」

「それはいい。息子の年考えてよ」

「それもそうね。ごめんなさい」

くすつと笑った母に、俺も笑い返した。

母一人小一人だったから、母と一緒に寝ていた時期は、他の子どもより長かったと思う。俺も別にいやじゃなかった。でも、今はそうしようとは思わない。俺と寝ていた頃、母は眠りがとても浅かった。夜中、俺が何かの拍子に目を覚ますと、いつもこちらを心配げに見ていた。ほとんど寝ていなかったのではないかと思うほどだ。

それはまるで、夢を見ることを怖がっているみたいだった。

そして、高学年に入ったある日、俺はその理由を知った。練習から帰ってきたら、母がソファで転寝をしていた。単に休んでいるだ

けかと思つて近づいたら、かすかな寝息が聞こえたのだ。母の寝顔を見るのは、ほとんど初めてじゃないかと思うくらい、珍しいことだった。起こそうか毛布を持ってこようか迷っているうちに、俺は背中に氷を入れられたような思いをすることになる。それ以降、俺は二度と、母と一緒に寝ようとは思わなかった。

か細く、甘く、すぎるように呼ばう声。

それは、外国人の名前のようだった。

聞きたくなかった。母が夢うつつに呼ぶ、その時は聞き取れなかった名前を知ってしまうことが、怖かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2827r/>

白銀の日々

2011年10月13日04時51分発行